

『身共は三兩二分でも何とか間に合ふ。』
 『いかん、いかん！ 銀主は己の甲羅に似せてポツポを暖める。——水ツ浪をすゝツちよる老人に、そのやうな大金があるものか。』
 『然らば三兩……』
 『なか〜。』
 『身共は二兩で我慢しよう。』
 『まだ〜。』
 『それでは一兩……か。』
 『もう一聲！』
 『オイ、白川——貴公は何程所望する氣か。』
 『されば……所詮、われ等は壬生の浪士ぢや。』
 『ナニ、たつた二分!?』

二

それツぼちの端下金なんかほしくないやうな口吻ではあつたが、たつた二分すら請判なしには、

拜むことも出来ないのだから、待つ身は相當に辛からう。然るに、遠藤勤以下の幹部は亥刻過ぎても歸つて来る氣配がないので、折角の金策も今夜の間に合ふ見込みが薄い。
 『あゝあ、こんなことなら、背のどろ、汗を鱈腹詰め込むではなかつた。』
 『左様——ロクな手當もせんといて、あのやうな獻立を作る奴の氣が知れんの。』
 『まつたく、佛造つて靈魂入れず……仲びゆくもの、角を矯めるやうなものぢや。』
 『さういふ間にも、われ等の勇氣は凜然として、敵を選ばんくらゐ武者ぶるひがして來たぞ。』
 『はツはツは、物騒な奴……この良夜を如何にせん!? 水でもぶツかけて參れ。』
 生欠伸の合ノ手に、下らない愚痴の大部屋へ、
 『おゝ寒い、寒い。——京の底冷え、寒心の至りぢや。』
 と廊下に、白い呼吸をはずませて來たのが同格の黄島、
 『なんだ、三勇士——いづれも不景氣な顔を並べちよるの。もつと、ちゃん〜火を熾さうではないか。』
 『うむ、炭を取りに行くのも面倒臭い。』
 『よしッ、僕輩が三番隊を代表して請求して參る。』
 『もう消燈時間ぢや。いゝ顔はせまいて……』

『いや、僕輩の顔を利かせる。』

『ははア、兄弟分が来たと申すか。』

『ナニ、それほど黒くもないと申した。』

『誰が？』

『大和の吊し柿がの。』

『逢つて来たのか。』

『なんの、今宵は犬川ぢや。』

『さては辻斬り……か。』

『止して呉れ。——その手を用ひたら風邪を引く。』

『それでも、貴公はとろ、いの七八杯も片付けて、腹減らしに出歩いたんぢやらう。』

『如何にも……』

『それが犬の川端歩きとあつては、矢張り辻斬り志願に相違あるまい。』

『うるさいナ。貴公も出て見い。——壬生界限は妙な評判が立つて、女按摩一人通つて居らんぞ。』

『へッ、ハックショ……大和の勇士——貴殿の兄弟分が噂しちよる。早いとこ頼む。どうやら、』

われ等も風邪を引いたらしい。』

『それも誰れゆゑ櫻炭……待て火鉢……』

氣も口も軽い黄島が、諸事節約勵行の會計方を口説いて、運んで来た炭火の勢ひを得た頃には、外出してゐた平隊士の面々も大半は歸つて来たし、自分の割當てられた小部屋に引籠つてゐた連中も、賑やかな笑ひ聲に惹かれて、何かうまい話でもあるかと集まり、頭数を勘定すると十四五名にもなつたが、いづれを見ても寒さうなオンパレで、鍋やきの阿彌陀も不如意である。

『呆れたの、これだけ頼もしい壯士が、一人として酒氣を帯びとらんとは……』

『つまり、これが非常時に於ける待機の姿勢といふ奴ぢや。』

『而も、幹部は枕す、美人の膝……醒めては抱す、加茂の水……と來やがらア……』

『痛快！ 方今、天下の形勢は累卵の如し。具眼の有志、之を知るや否や……』

『おそらく知るまいの。——諸君も知るまい。』

『僕輩は心得ちよる。』

『ははは、それは天下の形勢……拙者の申すのは、もつと軟かい方面の情報ぢや。』

『西か東か——』

『西方菩薩の淨土……』

『なんだ、抹香臭い本願寺の話か。』

『うんにや、島原のピカー、御幸太夫のことぢや。』

『あゝ、あの隊長の……あれが何とした？』

いやが上にも隊長の歡心を得て、己の地位の安泰を圖らうとする氏畑副長が、會津藩の御用達大黒屋源兵衛に働かせて、遠藤勤の寵妓身請けの相談中であるとか。

『ほほう、ほんとかの。』

『ほんとも嘘にも、今夜は大源が烏丸の副長安息所に呼びつけられとる筈ぢや。』

『シテ、その身代金は？』

『まづ、一箱……』

『えッ、千兩!? うゝむ……』

『野暮な唸り聲を出すな。』

『隊長は知らんのか。』

『そこが副長に業のある點ぢやテ。同じ御機嫌を取り結ぶにも、いろ／＼の手があつて、あつといはせるところに妙味もあらう。』

『せめて、その半分でもわれ等一黨に割愛して呉れたら、大黒屋の冥加金も立派に生きるぢやら

うに……』

『同感！ 平隊士あつての幹部ではないか。』

『異議なしッ……オイ、諸君！ どこぞで少し酒の工面をして、われ等珍選組の再吟味を試みようでは御座らぬか。』

『賛成！ 白川——もう、かうなつたら助勤の請判などは手ぬるい。臨機應變の手段に出よう。』

『ほほう、そんな口があるなら、拙者も半口乗りたいが、まさか相手が庄屋ではあるまいの。』

『ははは、先口の不義理でもあるか。』

『いや、拙者は鐵砲が得手ぢやで……』

三

平隊士のウルサ方の連帯で、賄方の親爺を脅かし半分に強要した金が、焼酎と味醂を等分にまぜた南蠻酒と代れば、翌朝の味噌汁に仕入れてある油揚げを焼いたり、生味噌がそのまま肴になるくらゐだから、晩の残りものに福があるのか、それとも何かに味練があるのか、微發して來た卵を割つた片見芋は、貴重品扱ひを受けてゐる。

『オイ、白川——さう欲張らんと、身共にも一口吸はせろ。貴公とは飲み分けの盟友ではないか。』

『ははは、さういられると膳所裏では兄弟になつとるさうぢやナ。』

『今夜はどこぞアテがあるのか。——大層養分を攝るの。』

『いや、お互ひに早う出世して、休息所を持ちたいものぢや。』

『うむ、これからの珍選組は武藝よりも、要領が第一らしいぞ。』

『われ等も副長を手本にするか。』

先刻の勢ひでは、ひどく幹部排撃の聲が高かつたのに、酒といふ剽軽者が入ると、一座の空気もなごやかに、彼等自身もそんな役柄に昇進して、ダラ幹みたいな生活を念ずるのだから、いづれ劣らぬいゝ加減な連中だ。

『幹事——大分酒が薄うなつて参つたやうぢやが、もう少し働いて呉れんか。』

『いや、もういかん！ 銀主の茶瓶が遁走して終ふた。遺憾ながら、これを以て散會……』

『コラ、青山——それはちと幹事横暴……われ等は絶対反対ぢや。』

『僕輩も黒川説を支持する。このまゝ寝よとて寝りりよか野暮ナ。あゝ、コリヤ……』

『愉快々々！ いつそ、この勢ひに乗じて、一舉に隊長の本陣を衝かうではないか。』

『うん、それはよい思案ぢや。われ等は遠藤先生に敬意を表すると同時に、太夫にも御意を得たさ。』

『面白い！ いざ、同志——突撃用意ツ……』

壬生の屯所の大部屋で、そんな工合にわあく騒いでゐる頃、島原の妓樓角屋では黒紋附に仙臺平のまぢ高袴の遠藤動が、愛刀虎徹を床の間に飾つて、取巻きの男女を相手に上機嫌であつた。

『この虎徹——自慢ではないが、よう俺のいふことを諾いて呉れて、誰かみたいに我儘は申さぬ。可愛い、奴ぢや。』

『阿呆らしこといはんといて……』

『ほほほ、太夫——そない怒らはんな。みなさんの前ではおとなしう黙つといて、二人になつてから、あんじよう調伏して上げなはれ。』

『婆ア——餘計な智恵をつけるな。』

『あのナ、隊長はん——ほんまに、この刀、夜泣きしやはりますか。』

『するとも、時折は人を斬つてやらんと、血に餓えての。』

『おゝ、いやらし。』

『なんの、いやらしいことがあるものか。』

没落過程にある佐幕方の偉大なる用心棒として、薩長の勤王派に拮抗しては鬼みみたいな豪傑も、美女に對すると一向に凡人と差別なく、適當な甘さを以てうぢやぢやけてゐる折柄、雇人の制止

を一蹴して、角屋の大廣間にどや／＼と雪崩れ込んだのは、例の珍選組の平隊士十四五名——床柱を背負つた遠藤助を見ろや、

『うえへッ……』

と一同、次の間へ平伏したではないか。

『お、何事か突發したかの。』

附添ひの副長助勤共が呆氣にとられて、眼ばかりパチクリさせてゐる間にあつても、流石は一隊の統領だけに、動は泰然として壯士に訊いた。

『何用あつて参つたと申すに……珍選組の隊士は啞者か聾者か。——これ、この床の間の一刀は伊達ではないぞ。』

そこで、招かれざる客一同、ぼんと袴の上から膝の邊を叩いて、一齊にわめいた。

『隊長ツト——今宵はわれ等も……』

塚原ト傳

數多い日本劍客中の權威、塚原ト傳といへば諸國遍歴の途次、近江の琵琶湖で自稱一刀流の名人に挑まれて、其奴が小島へ飛降りるトタンに、乗合船の水棹をトンと突いて、

『無手勝流とはこれでござる。』

などと武藝自慢を戒めたお話や、乗鞍ヶ嶽に隠遁して、老後の仙人生活に浮世を忘れてゐる折柄、はる／＼と訪ねて参りました宮本武蔵相手に、鍋蓋試合を演じます一節が有名で、既に讀者諸賢も御承知と存じまするによつて、今回は劍聖ト傳先生の若かりし頃、奥州出羽の羽黒山に乗込み、危き一命を山猿に助けられた美談をお伺ひして、後連と交代いたすことにいたします。

ト 扱、出羽の名山羽黒の大黒堂の別當、四那丸入道圓海と申す修驗者は、身の丈七尺に近く五十人力の怪僧、赤檜の八角棒を巧に使ひまして、太陽霞の構へといふのを工夫いたし、いかなる武藝の達人と雖も、唯一撃の下に打破ると豪語して、門弟三百有餘名の上に傲然と威張つてをりま

した。

ある日のこと——坊主のくせに圓海は朝から狼鍋か何かでパイーやつてますと、門人の中でも天地人の上位に据わる辨天堂の龍山が、鼻をひこつかせて、その座敷へ顔を出しました。

『申上げます。』

『お、龍山か——一杯どうちや？』

『ハイ、只今、常陸の住人仁科與四郎と申す二十一歳と覺しき武者修行、どうか先生に一本、御教導下さるやうにと参りましたが、いかゞ取計らひませう。』

『うるさいツ。わさ／＼伺ひを立てるには及ばん。そんな聞いたこともない若造なんか、貴公達がいゝ加減に叩いてやつたらよからう。』

『ところが、庄内の旅籠屋玉屋の紹介状を持つてをりますんで……』

『さうか。何故、それを早く申さんのちや。——道場へ通して置け。』

平生はひどく勿體ぶつてゐる奴が、どうして自分から進んで面會する氣になつたかと申しますと、つまり就職運動と同じこと、紹介状が口を利いて——玉屋が取りもつ圓海ナ……

『お、俺が天下に名高い四那丸入道ちや。』

『これは／＼、お初にお目にかゝります。手前は……』

『うん、わかつとる。どうせ大した手腕ではあるまいが、まア、ちよつと小手調べに門人と立合つて見なさい。——こゝに並んでゐる羅漢はほんの一部分で、門人は貴公を入れて丁度三萬三千三百三十三人ある。』

まるで三十三間堂の佛の數みたいな駄法螺を吹いて馬鹿にしてゐましたが、この壯者は案外達者で、圓海門下の龍虎、四天王、八天狗、十六坊、三十六童子がいとも簡単にボン／＼と片付けられて終ひますので、入道すつかり面喰ひの態でございます。

『さア、坊主——來い！』

『お、参るぞツ……俺の棒は門弟共とはダンチちや。頭をかすれば腦骨微塵、身體を撫でれば、輕くて不具者になるぞよ。覺悟はよいか！』

『いかにも……拙者とても木割は批杷の木造り——當つたら最期、超特急の地獄行きは必定……念佛を唱へてから参れ。』

『何を吐かすか、この青二才奴！』

『ははは、圓海坊主——よツく承はれ。われこそは常陸の國の住人仁科與四郎とは世を忍ぶ劍ネーム……』

塚原ト傳
『ナニ、劍ネーム？』

『左様——まことは常陸塚原の城主土佐守の一子塚原小太郎勝義なり。』
 『ふむ、さては上泉伊勢守の龍虎の一人にてありつるか。』
 『どうだ、驚いたか。——其方は過日、わが師伊勢守殿の病氣引籠中を勿怪の幸ひに、上州箕輪の道場に乘込み、われら不在をよいことにつけ上り、よくも勝手な振舞ひいたせしよな。』
 さうと知つたら、いくら玉屋の紹介でも面會お断わりだつたでせうが、今更、のツびきなりません。

實は圓海入道——その前に主従十三名が山伏姿で諸國の道場を荒し廻り、上州へ参つた時には幸か不幸か、日本武藝のナンバワン上泉伊勢守が病臥、小太郎も郷里の父の病氣見舞で歸省中、相弟子の磯端伴造は折悪しく旅へ出てをりましたので、その師匠と龍虎のゐない間を狙つて、四天王の丸目藏人以下の面々に無念の思ひをさせて引上げたことがあります。

その仕返しに塚原小太郎が一人で押しかけた次第でございます。

『何を小癪な……貴様の如き若造に、これが破れたら破つてみる。』

圓海獨特の太陽霞の構へもソウトウなものです、小太郎の細い木剣が、まるで招魂社の大鳥居みたいな太さに映りますので、その蔭に匿れて五分と打込む隙もございません。

『どうした、圓海——怖れをなしたか。』

『何をツ小太郎——目にもの見せるぞ。』

ビュウツと唸りを生じて打ち下ろす丈餘の八角棒が、五十人力の物凄さで飛んで参りましたから、東國の麒麟と謳はれる豪傑も、そのまゝペンシャンコに返り討と思ひきや、それが小太郎の誘ひの一手で、ひらりと體を躲せば間髪を入れず、

『えいッ……』

と氣合ひがかかるトタンに、却つて圓海入道の方が腦天を碎かれてノビてゐました。

さア、それからは道場の内外、割れるばかりの大亂闘でございます。——それ、師の坊が殺されたといふので、羽黒の全山總動員のサイレン代りに、法螺の貝をブウ／＼鳴らしましたから、何事の非常時ぞやと、味噌すり坊主が挿木さしきを持つたまゝ馳せ参じたくらゐ……大黒堂界限は、夏の汐留驛へ西瓜列車が着いたやうな騒ぎでございます。

こちらは小太郎勝義——初代波平安の大刀を振りかぶつて、縦横無盡の劍戟……右と左に斬り分けた死骸の山から流れる血は、新緑の候に時ならぬ紅葉を散らしました。

それが只今の十時から晝の二時まで、前後四時間を通じての休む間もなき奮闘とあつて、流石の山伏共も尻尾を巻き、

『あッ、今日は佛滅か。——道理で勝てん筈ぢや。』

なんて負け惜しみをいひながら、一人残らず逃げ去りましたので、ホッと一息ついた彼氏——水を飲み、溪川へ下りたのが、矢張り油断大敵でした。

『斬りさめの水は格別だ。あゝ、甘露々々。』

とガブ／＼やつてゐます隙を狙つて、ブーンと分銅を飛ばせましたのが圓海四天王の一人、毘沙門堂探海と申す鎖鎌の名手でございます。

どうやら、その邊に待機の姿勢で網を張つてゐたらしく、塚原小太郎——ハツとしたが後の祭り……八尺の鎖がぐる／＼と首へ絡んで、不覺にも生捕りの憂目を見ることになりました。上手の手から水が漏れたとは、正にこれでございますか。

そして、その夜は一晚中、八ヶ峰の絶頂から谷間へ逆さ吊り——これは羽黒の山法ださうでございまして、何か山伏仲間に不都合を犯したものがありますと、其奴の身體を縛つて兩方の足首を括りつけ、宙吊るしの刑を行ふ掟だとか……而も、塚原小太郎は師の坊の仇敵ですから、翌朝になつたら門弟一同が一太刀づゝ一寸試しの五分試しにして、鬮り殺しといふ、今や、風前の提灯みために、ふら／＼心細い次第でございました。

ところが、それから何時なにか経ちましたか、夜はシン／＼と更けわたり、羽黒の山は草木も眠る丑滿つ頃、逆さ吊りの血が下つて半死半生の塚原小太郎——ふと氣がつかますと、數十匹の猿にキ

ヤツ／＼と擔がれて、お神輿みこりみたいな工合にユサ／＼と揺られてゐるではありませんか。

やがてのことに運ばれて介抱を受けたのが猿の棲家……そこで、やつと小太郎に合點が参りました。——羽黒へ登る山の麓で、百姓達に殺されさうになつてゐた一匹の大猿を、小判一兩で許して貰つた、情は人の爲めならず……かうやつて御恩を返して、全身五十三の傷所をベロ／＼舐めて呉れます。

『あゝ、これ／＼、拙者、いさゝか揶ぐつたくなつたぞよ。』

ともぞ／＼して、キャツ／＼と笑ひましたので、彼氏に身請された猿の大統領、悦ぶまいことか！

『おゝ、塚原先生がわれらの同志になられた。』

なんかんと、ひどく優待されまして、それからの十日ばかりは草根木皮を藥代用、木の實を御飯以上に賞味して、すつかり猿のお仲間入りで、

『感心なものぢや。人間より三本毛が足りないなぞと輕蔑しとるが、いや、どうして、猿の世界の方が義理人情を辨へとる。』

出来ることなら、一生でも彼等の娑婆に厄介になりたかつたかも知れませんが、健康も充分に恢復いたしますと、そんな呑氣な沙汰ではられません。

『さて、大猿どの——いろ／＼手厚き世話に相成り、千萬忝けないが、拙者も急ぎの旅の空、これより再び人間に轉向して、上州へ草鞋をはかねばならぬ身の上ぢや。』

『キヤツ／＼キヤツ……』

『お、悪く思ふなよ。』

『キヤツ／＼キヤツ……』

何をいつてもキヤツ／＼キヤツで、一向に要領を得ないやうですが、そこは以心傳心……どうやら意味も通じたらしく、それでは是非に及ばぬと、猿酒の壺を割つて送別の宴を張つて呉れましたが、いよ／＼峠の一本松までお見送りのサヨナラに、

『先生——ほんの輕少でお恥しいんですが……』

といひたげな風情で、猿一同として差出したるは、柏の葉に包んだ餞別——さて／＼義理の固いことではあると感服いたしました塚原小太郎……麓へ下りてから、何が入つてゐるかと開けてみますと、どこまでも猿の心づくしは行届いたもので——なんと、毛が三本!!

待たるゝ春

第一景 クリスマス

モダン文化の現實主義とでも申しませうか。——當節のお子供衆諸君に、下手なことを訊かうものなら、トタンに輕蔑されてしまひさうです。

『西郷隆盛と宮本武蔵——どつちが強い?』

『馬鹿だナ、小父さんは……そんな時代錯誤的な質問がありますかツてんだ。』

『さうかね。』

『さうさ。さういふのは寧ろナンセンスだよ。——出直しておいで……』

『それちやポリーナスとサンタクロース——』

『待つてました!』

『ははは、生意氣いふな。』
 『だつて、みなさんが、さう仰しやつたぢやないか。』
 『それは去年の暮の話だ。』
 『ははア、かういふのがノの字組なんだね。』
 『いやに感心してやがるナ。何がノの字組なんだ？』
 『いろは歌留多にあるだらう——のど元過ぎれば熱さを忘れる。……サンタンたりし歳末風景をもう忘れちやつたのかい。』
 『皮肉なことをいふな、子供のくせに……』
 『御免なさい。ボク、何でも思つてゐることを口に出しちまふ性分なんだよ。——まったく、子供はテンシンランマンだらう。』
 『自分でいつてりや世話はないや。』
 『それで、小父さん——ポーナスとサンタクロースがどうしたんだい。』
 『うん、ポーナスとサンタクロース——どつちがえらいか知つてるか。』
 『知つてるさ。そんなことぐらゐ心得てなかつたら、サラリーマンの令息としてモグリみたいなもんだよ。』

『生アいつてら。』
 『ほんとさ。——そりや、何てたつてポーナスの方がウワテぢやないか。』
 『どうして？』
 『だつて、小父さん——ポーナスの出ない家にや、サンタクロースのお爺さんなんか来つこないんだからね。』
 『さうでもないだらう。』
 『うゝん、かう世智辛くなると、ポーナスにありついてさうもない貧乏人のところは、素通りするよりほかに手がないんだつて……』
 『煙突が何本あつてもかい。』
 『あゝ、あんなもの、をかアしくて遣入れますかツてんだ。』
 『どうして？』
 『このころは工場でもないのに、いろんな型の煙突があるんで、うつかり飛込まうものなら、とんでもない目に逢ふさうだよ。』
 『へえゝ、昔からサンタクロースのお爺さんは、大抵ストーブをくゞり抜けると、可愛いベビちゃんやんの寝てるベッドの側へ行つて、靴下の中に玩具なんか澤山入れて来るものと、相場がきまつ

てるぢやないか。』

『それがね、當節は氣をつけないと、お話にならない臭いところへ落ッこちることがあるんだつて……』

『あ、成程——御不淨の上なんかでクル／＼廻つてる換氣筒か。』

『それ／＼、そんなことになるよ、折角、舞込んで呉れた親切な福の神をクリスマス……あは、舌がまはらないや……』

第二景 非常時風景

こんな工合にやられるんですから、現代の子供は油断がなりません。そこへ行くと、昔のお大名なんてものは大人のくせに、幾歳になつてもノンビリしたものでした。

今からざつと百年前の某州富ヶ淵は、赤字不足守五萬石の城下町でしたが、どうしたお扶持の加減ですか、御家中一統の貧乏なこと、實以て箸にも棒にもかかりません。——お城勤めの非番には、裏の畑へ出て野良仕事にいそしみ、お汁の實や漬物のネタに、自給自足を試みたり、夜なべに傘の骨作りや楊枝削りを勤み、目のくぼむほど内職に精を出しても、月に三度の尾頭つきを食膳に供へるのすら怪しいくらゐ……武士は喰はねど高楊枝なぞと申す金言も、どうやら、この

藩士諸君のことから始まつたのではないかと存ぜられます。

そんな財政状態ですから、平素御不用のもの、例へば鎧兜の類なんかを、麗々しく床の間に飾つて置くやうな、不經濟な真似はいたしません。只今の言葉で申しますと、つまり、資本を廢かして置かないんでせうナ。どちらさまでも質屋の倉へ格納といふ次第……まア、これなぞは、別に天目を仰ぐ必要もない泰平の御代ですから、一向に差つかへはなかつたやうでしたが、何かにつけて、ちよい／＼着て御登城の麻上下を、御最員の小父さんへお預けの身は、丁度、御當世のサラリーマン諸兄が、お前とならばどこまでも、一張羅のグッドモーニングを特別當座に入れて、御禮通のトタンに、のツびきならぬ筋合の御婚禮披露に招かれたり、重役家の御不幸に告別式の受付係を仰せつかるのと好一對……時の古今を辨せず、頗る當惑いたすことがあります。

就中、面喰ひますのは城下に出火の節でございます。——どんなに遠くお城を離れた裏長屋のボヤでも、火の見櫓の半鐘がチャンと鳴つたからには、お侍一同、麻上下に威儀を正して、お殿さまの御機嫌を伺はねばならぬことになつてをります。

さういふ非常時に臨んで、質屋へ殺到する諸士のお顔に、必死の色が浮んでるのも、御尤もの次第ではありませんか。

『さればと申して、この場に及んで、他に品のあるかないかは、それがしよりも、却つて、その

方の方がよく存じてをるであらうがナ。』
 『へえ、何遍もアコギなやうでございますが、いくら本年御最良の旦那さまでも、手ブラでお持ち歸りは殺生です。』

『いや、空手で参つたわけではござらぬ。それがしとても年期の入つた質置武士……先祖傳來の麻上下をロヘで受出さうなぞと野暮は申さぬ。これ、この通り——と、つさの思案で、入れ替への品を持参いたしたではないか。』

と削りかけの楊枝の木を束にして見せれば、別のお侍も傘の骨を箆竹みたいに振り立て、番頭を口説きます。

『拙者とても同様——もう少し手をかければ、勿體なくも易占の具と化し、神前に供するものを携へて馳せ参じてをるのに……』

『さういふ間にも半鐘が止んで、鎮火の知らせにても廻らば、われらは忽ち殿のお怒りを蒙り、浪々の身の上となるは必定……その節は拙者も當家の番頭に住込む所存……覺悟はよいか。御同役——いかにござる。』

『いかにも同感！ もはや、それがしは登城を諦めて宅へ戻り、履歷書を認めて参るほどに、再び主人への取次きお頼み申すぞ。』

すつた、もんだの掛合ひが曲りなりに纏つて、麻上下の總員出揃ひとならぬことには、假令火事の方は片付いても、半鐘を鳴らしてゐなければならなかつたさうで、大廣間に皺だらけの式服オンパレードを、ぼんやり眺めてゐる殿さま生活も、案外ラクではないらしく、お側小姓に欠伸まじりの、待ちわびた聲をおかけになりました。

『これ、桐彌——火事はまだか。』

『へ、ッ、いまだ参上……仕りませぬ。』

第三景 除夜の鐘

火事が只今参上テナことになつたら大變ですが、兎に角、昔は形式を第一に尊びました結果、こんな茶番狂言にもあるまいと思はれる實話が、今の世に残つてゐるんでせうが、その赤字五萬石の初春に、お祝ひ言上の年賀登城が、また御難で——

『三の酉の歳は火事早いと申す通り、當年は相當に麻上下の御用繁多ちやつたからには、その都度、出し入れせんで、手許に置いた方がトクではなかつたか。』

『いかにも、御家老さま仰せの通り、利息の踊らぬだけでも助かる理窟は、いづれも承知いたしてござりますれど、何にいたせ、當藩は天下名うての貧豪揃ひ……常に、式服をお屋敷に留め置

かるゝは御重役さま方に限り、われ／＼風情はなか／＼に不如意千萬……御賢慮のほど願はしう存じあげ奉りまする。』

『ほう、然らば、明あけの春には、鐘撞堂に屈強の壯者共を手配せずばなるまいの。』

『ハハツ、御明察のほど、恐れ入りましてござりまする。』

臣下代表の有志が、一の家老へ陳情の模様から考へますと、例の麻上下着用の工面が、早いとこ出来さうもない連中が大分あるらしく、除夜の鐘が百八つ鳴り納まつて福茶一服、正装を整へた總員總登城して大廣間に控へるほどに、やがては東天紅の初啼きも目出度く、初日の出のトクンに、

『美はしき殿の御尊顔を拜し、新年の御慶うやまつて祝着至極に存じあげ奉りまする。』

一齊に合唱するのが恒例なのですが、假令、下界がどんなに明るく陽氣にならうとも、お廊下の雨戸を締め切つた殿中に燈火燦爛と輝き、時刻と數に頓着のない除夜の鐘が、いつまでも引續いて鳴つてゐる間は、矢張り大晦日が明けにくいことにしようではないかと、恰も、民間の商人共が提灯をつけて歩きさへすれば、元日の朝になつても勘定の貰へると、同じ時と場合に臨んだ應變の打合はせらしうございました。

『これ、桐彌——正月はまだか。』

『へ、ツ、いまだ参上……仕りませぬ。』

『除夜の鐘は……鳴るほどノウウ。』

お大名の洒落はこの程度で……殿様は待つ身の暇つぶしに、美しい侍女の酌で御酒宴を開かれておいで遊ばします。

『これ、桐彌——遙に聽ゆる鼓の音は、町家に錢を稼ぎ廻る萬歳とやら申すものではないか。』

『お耳觸はりのほど、恐れ入り奉りまする。』

『うむ、あれなる三絃の音は、城下に春をことほぐ替女の鳥追ひではないか。』

『御通人のほど、恐れ入り奉りまする。』

『然らば、もはや、正月が参つたのではないか。……これ、浮良之助を呼べ。——予は明君であるぞよ。不届者奴が……』

大變な御立腹で一同ハラ／＼してをりますが、流石は赤字藩中の智慧袋だけあつて、一の家老はビクともいたしませぬ。

『これ、浮良之助——正月はまだか。』

『へ、ツ未だ参上……』

『黙れ！ そちの耳には、彼方に響く萬歳も、替女唄も聽えぬと申すか。——予を暗君と侮らば、

その分には差しおかぬぞ。』

『あ、いや、暫く、暫く、暫く……お言葉を返して恐れ入り奉りますれど、あれなる唄囃子は……』

『うむ、あのやうなものが、年の暮に城下を徘徊いたすと申すか。』

『へ、ッ、恐れながら……チンドン屋奴にござります。』

その愚問賢答の間にも、除夜の鐘は際限なく鳴り續けてゐたさうです。

二、現代篇

お伽快談・桃太郎

琴子ちゃんは當年とつて三歳であるが、早生れで、而も都會そだちのせむか、どうも、なかなかおしやまのやうだ。

例へば、夜半の二時ごろ目をさまして、

『お母ちゃん——おしッこ……』

もう一人——去年の夏に生れた赤ん坊があるので、その糸子ちゃんに添寝の若い母親が、いくら枕元で呼んでも、起きてくれさうな景色もないとみるや、

『お母ちゃん、お母ちゃん——おしッこだつてばア……おねしよしてもいいの？』

よい筈のない、この一言——夢に逢ふべき人が前線に御奉公中とあつて、その留守を護るお母

ちゃんたるもの、あとの始末に手敷のかゝることを思へば、別に乳呑兒を抱へての寝入りばなと雖も、ガバと起きあがらざるを得ないであらう。

この母子三人を樞軸として、その外に六十七のお婆ちゃん、二十前の女中さんとの、併せて五名のもが當家の構成メンバーであるが、さういふと、女ばかりで物騒だから、牡である猫のトラちゃんと猛犬ボチとが外廓として、常に警戒おこたりないことまで、書いておいた方がよいかも知れない。

そして、問題の琴子ちゃんが、女中さんに非常によく懐いてゐるのが、何かにつけて大助かりであるらしい。——昨今の女中さん氣質からいへば、氣むづがしい老人や、小うるさい子供の多い家庭は、兎角、敬遠されがちであるのに、まだ、その頃は募集の許されてゐた、新聞の案内廣告に麗々しく、

「老人子供の好きな方を望む——なぞと、とんでもない條件をつけて出したのに、われと進んで應じて来ただけあつて、そのお目見得の初日から琴子ちゃんと仲よしになり、お婆ちゃんの御意にも召したやうである。

その前の三十女は、お姑さんとの折台よろしからず、何のアテもなく九州の南端から飛出して来て、初めての東京は神田の宿屋で、つれづれに見た新聞廣告が御縁となり、大きな柳行李二つ

も持ち込み、決意のほどを言外に承したのだが、

『ハイ、お嬢ちゃん——抱ッこ……』

お愛想の笑顔で、兩の手をさし伸べても、琴子ちゃんはイヤ／＼をして、一向に寄りつかず、お婆ちゃんはお婆ちゃん、早くも二日目にして茶碗をコンクリの流しに、派手な音をたて、滑らかしたものであるから、

『あんなドチは、どもならん！』

妙な折紙をつけたのであつた。

かくて、彼女の所在が判明すると、九州の實家と嫁入り先との三角關係は、電報や手紙の往復頻繁となり、はては交番のお巡査さんまでが仲に入つて、

『兎に角、歸つた方がい／＼んぢやないかねえ。——旦那さんがわるいんぢやねえんだろ。』

頗る人情味ゆたかな説論をなさつた効果は觀面……約一月の間を完全な東京のアドレス・ブールに利用した彼女が、目出度くも覆水盆に復ることになると、

『折角、出て来たからには、見物ぐらゐはしてお歸りよ。』

根が善人であるところのお婆ちゃんは、二重橋から明治神宮は申すも畏し、淺草から上野へ廻つて、

『この人が、あんだの國で一番えらい豪傑やろ。』

動物園への途次、西郷さんの銅像を紹介したり、高輪の泉岳寺へお詣りしたり、丸二日といふものは一切身錢をきつて案内してやつたのに、

『どうも、いろ／＼と有難うございました。』

といふ通り一遍の挨拶はあつたものの、それから先は何處へ行つたものやら……ハガキ一本も來ない鐵砲玉だつたので、

『あゝいふ情のない女やで、琴子の懐かなんだのも無理ないわ。』

いくら笑顔で迎へても、どこか心の底に冷いものが流れてゐたのが、頑是ない子供にも感じられたのだらうといひだけであつた。

二

それと反對に、今度の女中さんは八王子在の十八娘で、特に老人子供のある家庭を望んで來ただけのことはあつて、どこか氣の合ふところがあるらしく、先方から別に手をさし伸べないでも、琴子ちゃんは進んでモチちゃんの膝に乗る。——このモチといふのは、決して彼女の本名ではないのだが、あまり物おぼえのよくないお婆ちゃんが、おかやといふ古風な名前を吞込めないまゝ

に、何か用事を頼む時には、當らず觸らずの呼び方で、

『モシ〜』

とやつたのを、琴子ちゃんが聞きかじつて、モチ〜からモチちゃんとなり、一家こぞつてお

かやさんといはなくなつたのである。今しも、琴子ちゃんはモチの膝に抱かれて、エホン・桃太郎を読んで貰つてゐる。――

ムカシ ムカシノ ソノムカシ デイサン バアサン アツタトサ

『どこ〜』

『さア……どこでせう？——あるところよ。』

『モチちゃんのぬなか？』

『さう〜、さうしときませう。——さうすれば、山もあるし、川もあるし……』

デイサン ヤマニ シバカリニ バアサン カハニ オセentak

『お婆ちゃんがジャブ〜してるでせう。』

『おねしよしたの？』

『あら……だアれもおねしよなんかする人、ゐないわよ。』

『お利口ちゃんねえ。』

『だつて、お爺ちゃんとお婆ちゃんだけなんですもの。』

『お父さん、ゐないの？』

『ゐないんでせう。』

『琴子のお家みたいに、オクニノタメ、ヘイタイチャン？』

『さうちやないのよ。——お母ちゃんもゐないんですもの……』

『さびちいわね。』

『だから、桃が流れて来るのよ。いゝですか。——』

バアサン ジャブ〜 オセentak ソノトキ カハカミ サアラサラ オホキナ モモガ
ドンブラコ

『ねえ、琴子ちゃん——大きなお桃でせう。ドンブラコ、ドンブラコつて……』
 『なんで?』
 『さア、何でですかねえ。』

オヤ マア オホキナ モモダコト モモヨ コツチヘ コイコイ〜

『ボチみたいねえ。』

『ワンちゃんは、まだ〜よ。』

『なんで?』

『まだ桃太郎ちゃん、生れないんですもの。』

『糸子ちゃんみたいに、病院で生むの?』

『いゝえ、お家ですよ。』

『なんで?』

『お母ちゃん、ゐないんですもの。』

『ふーん。』

バアサン オミヤノ モモ ダイデ ウチヘ カヘツテ チイサント フタリデ ナカヨク
 タベヨウト ホウチヨウ アテル ソノトタン モモハ バチント フシギニモ フタツニ
 ワレテ ナカカラハ オギア〜ト カハユラシ ヨトコノアカチヤン ウマレデタ

『ばんぢアい!』

『さう〜、桃太郎ちゃんが両方のお手々をあげてるわねえ。』

『庖丁——痛くないの。』

『痛くなんかないわよ。——桃ですもの。』

『痛かつたらば?』

『さア、どうしませう。』

『メンチョ、つけるといゝわ。』

『ほほほ……』

『モチちゃんも、つけなちやいよ。』

『ふい〜。』

『お顔へよ。——たくちゃん、ブツ／＼出来てるぢやないの。』
 『あら、これ、ニキビつてもんよ。』
 『琴子、出来てないわよ。』
 『そりや、さうよ。』
 『なんで?』
 『子供だから……』
 『ヨイコドモ——出来ないの。』
 『さうでせう。』
 『ん、ぢや、桃太郎ちゃん——ニキビ、出来ないわねえ。』

三

モモカラ ウマレタ モモタラウ キハヤサシクテ チカラモチ オニガシマヲバ ウタン
 トテ イサムココロニ キルヨロヒ バアサンツクル キビダンゴ

『お爺ちゃんが嬉しさうな顔をして、鎧を着せてるでせう。』
 『桃太郎ちゃん——女の子?』
 『どうして?』
 『だつて、かん／＼結つて、赤いおべ、着てるぢやないの。』
 『昔の人だからよ。』
 『ふーん……お婆ちゃん、——なに拵へてんの?』
 『日本一のキビダンゴ!』
 『タマ／＼みたいに、大きいわねえ。』
 『どつさりあるでせう?』
 『モチちゃんのも、たくちゃんあるけど、小ちやいわねえ。』
 『あら、ニキビぢやないわよ。——キビダンゴ……キビでつくつたお團子よ。』
 『おいちい?』
 『おいちいわよ。——もう先、太郎ちゃんこの小父さんが岡山からお歸りになつた時、おみやに頂いたでせう。』
 『ふーん……』

『忘れちゃつたのね。——もう賣つてないのかしら……こないだ、お歸りになつた時は、千うどんだつたけど……』

日本一ノモモタラウ コレカラ デカケル オニガシマ チイサン バアサン サヨウナラ
ドウゾ タツシヤデ オマチアレ

『おみや、買つてつてあげるからね。おとなしく待つてらつちやいッて……』

『そりや、琴子ちゃんのお婆ちゃんがお出かけの時でせう。』

『桃太郎ちゃん——買つて來ないの？』

『買つてなんか來ないけど、お車に一杯、積んで來るわ。』

『ヨイコドモねえ。』

『だから、かうやつて、お爺ちゃんとお婆ちゃんと三人で、村の八幡さまにお詣りして——では、行つてまゐりますツて、ハイチャイしてんのよ。』

『ハンケチ——振らないの。』

『まア……どこで、そんなことおぼえて來たの。』

『久美子ちゃん——汽車ぼッぽの時、やつてたわよ。』

『そりや浪子の眞似よ。』

『どこの子供？』

『子供ぢやない、大人よ。』

『生意氣ねえ。』

『あら、久美子ちゃんの方が、よッぽど生意氣だわ。』

『琴子は？』

『さア、とつちでせう？』

ノコヘ ヤマコヘ ユクホドニ イヌガービキ アラハレテ オコシニサゲタ キビダンゴ
一ツクダサイ オトモスル

『ワンちゃんがね、日本一のキビ團子——一つ頂戴ツてんで、桃太郎ちゃんがお腰にさげた袋の中から、出しているところよ。』

『ハマツク、持つて來なかつたの。』

『ハンドバッグ!? そんなもん、桃太郎ちゃん、持つてないわ。』
 『なんで?』
 『男の子ですもの。』
 『あ、ちようかく。』

オツギニ デテキタ オサルサン イヌノマネシテ キビダンゴ ボクニモーツ クダサイ
 ナ
 キジモ アトカラ トンデキテ ナカヨク ケライニ ナリマシタ

『かうやつて、みんながお團子を一つつつ、わけて貰つたのよ。』
 『ハイキユウ?』

『さうぢやないわ。』

『ん、だつたら、もつとやればいぢやないか。』

『だつて、鬼ヶ島へ行くまで、まだ遠いんですもの、一遍に、そんなにやつたら、桃太郎ちゃん、自分のがなくなるぢやありませんか。』

『あ、ちようかく。』

『さ、早く鬼ヶ島を征伐させよう。』

『まだよ。』

『どうして?』

『だつて、モチちゃん——遠いつていつたぢやないか。』

『でも、もう家來が勢揃ひしたんですもの。』

『汽車ぼつばに乗つてくんでせう。』

『モチの郷里からだから、省線電車よ。』

『ちんじく——通る!』

『え、通りますわ。』

『代々木——ちなまのま——急行はとまりまちえん……』

『それから?』

『いだばち——お茶がらの水——』

『あら、お茶の水よ。——どうしたんでせうね、ほんとに……愛國婦人會が發展的解消したら、誰もあつめに來なくなつちやつて、お茶殻は溜まる一方で、困つちやふわ。』

日本一ノハタ タテテ オフネニノツタ モモタラウ イヌ サル キジノ ケライドモ
ツレテワタルハ ウミノウヘ

『これ——軍艦ぢやないわねえ。』

『え、昔は、かういふお船で、どこまでも渡つて行つたのよ。』

『チンガポールまでも？』

『さうく、もつと遠くの方へも、行つたんでせう。』

『鬼ヶ島とチンガポールと、どつちが遠いの？』

『さア……同じやうなもんかも知れないわ。』

『ん、だつたら、もう落ちちやつたぢやないか。——琴子、モチちゃんと一緒に日の丸もつて、町會の小父ちゃんやお姉ちゃんと、みんなで氷川ちやまから區役所の前まで行つたわねえ。』

『さうく、よくアンヨ出來ますねえツて、河井の小父ちゃんに賞められたでしょ。』

『それからサ、あのサ、よそのお家へ寄つて、クペロラちゃんのお姉ちゃんと、くす餅、喰べたわねえ。』

『窪寺さん——』

『クペロラちゃん——』

『ほほほ……また買ひに行きませうかねえ。』

『え……これ、飛行機？』

『鷗でせう。』

『かアもめ、かもめ、とうかの晩に、出やアる。』

『そりや、かアごめ、かアごめよ。これはカモメ——海の上を飛んでるコッコよ。』

『タマ〜、生む？』

『生むでせうね。』

ワルモノドモノ オニガシマ アカオニ アヲオニ イハノウヘ ウミヲワツツテ クルフ
ネヲ ナガメテ ビツクリ タイヘンダ

『赤鬼が望遠鏡で見てるでせう。』

『このお馬ちゃん——首がないわ。』

『お馬ちゃんじゃないわよ。大きな岩の上に跨がつてるのよ。』

『お背中に乗ってんでせう。』

『違ふのよ、岩……大きな石の塊よ。』

『象ちゃんより大ツきい？』

『もつと——大きな岩……どうも、あんまり上手な繪ぢやないわねえ。』

『青いのも鬼ちゃん？』

『さうよ、みんな鬼よ。』

『ヲトコ？』

『さうね、女の鬼なんて、桃太郎ちゃんの繪で、見たことないわ。』

『モウモちゃんみたいねえ。』

『角を生やして……』

『どうでちゆか、男のくせに、赤いおズロなんかはいて……』

オフネノナカノ モモタラウ キジヲトバシテ テイサツキ イヌトサルトハ トツゲキノ

ワレニツツイテ ケツシタイ モノドモ ヌカルナ オクルナヨ テキゼン ジャウリク

オニガシマ

『まるで、コレヒドールの要塞みたいねえ。』

『なんで？』

『岩で固めてあるぢやないの。』

『カリン糖より固い？』

『もつと——固いわ。』

『それぢや、桃太郎ちゃん——噛めないでちよ。』

『大丈夫！ まづ、キジちゃんが空から急降下爆撃をすると、おサルさんが手榴弾を投げつけて、敵のトーチカへ飛込むし、ワンちゃんはワンちゃん、お城の真正面から攻めて行つて、大高源吾みたいにかケヤで御門を叩き破るのよ。』

『桃太郎ちゃんは？』

『アメリカや英國の司令官みたいに、うしろの方にはかり引込んでやしないわ。——御覽なさい、

次の繪を……』

五

マツサキ カケタ モモタラウ オニノタイシヤウ 一キウチ 三十六カン テツノボウ
クルリくト フリマハス ガウリキ ムサウノ カシラヲバ カタナモヌカズ チヨン
くト センスーツデ アシラツテ ナンナク クミフセ ウマノリニ ナツテ ボカく
ボカくト ゲンコツ イタイムニアハセ アダスルモノハ コノトホリ タツターウチ
サア ドウダ

『強いわねえ、桃太郎ちゃん！』

『強いでせう。——こんな大きな圖體の鬼の大將を、ギユウく押さへつけてるんですもの……
ねえ。』

『うれちいくツて、いつてるわ。』

『誰が？』

『鬼のタイチヨウよ。』

『苦しい、苦しいツてんのよ。——うれしいぢやないわ。』

『ちようかく。この鬼ちゃん、泣いてるの？』

『え、負けた、負けたア……堪忍して頂戴！ もうわるいことはいたしませんから、生命ばかりはオタくツて……』

『なみだアが、ぼおろぼろ——』

『さうく、鬼の眼に涙ツテ、これから始つたのかしら……』

『ワンちゃん——どこ？』

『こゝにゐるでしょ。——赤鬼のアンヨに喰ひついて、引ツくり返してゐるし……こつちの方では、おサルさんが赤鬼の喉笛を狙つて、お手々とアンヨでお腹を引ツ掻いてるわ。』

『キジちゃんは？』

『黄色い鬼のアタマを、尖つたクチバシで突ツついてるでしょ。』

『いふことをきかない子は、お鹽をつけてアタマからガリく喰べてしまふぞオ……』

『そりや、一つ目小僧よ。』

『とつつめ小僧——どこにゐる？』

『ゐないわ、鬼ヶ島には……』
 『モチちゃん——探して来てよ。』
 『あれは舌切雀でないと、出て来ないわ。』
 『読んで——タツキリ雀!』
 『まだ、鬼ヶ島を鑑定しないぢやありませんか。』

ユルシテクダサイ ムデウケン カウサン カウフク イタシマス オニノタイシヤウ ア
 ヤマツタ
 シカラバ ユルシテ ツカハスト 日本一ノ モモタラウ カチドキアゲテ イサマシク
 ニフジヤウシキヲ オコナツタ

『素敵ね、まるで日本軍の南方作戦そっくりだわ。』

『桃太郎ちゃん——コードモ?』

『さうでせう、多分……』

『しく〜』

『十三・七つ——』

『お月さまとおんなじね。』

『さうよ、えらいわねえ。』

『幼稚園——どこ行つたの?』

『そんなとこ、行きやしないわよ。』

『なんで?』

『昔のことですもの。』

『なんでムカチのことなの?』

『お伽ばなしなんですもの。』

『ふーん……』

『琴子ちゃんは、どこの幼稚園へ行くの?』

『そんなとこ、琴子、行かないツ。』

『なんで?』

『桃太郎ちゃん、行かないんだもん……』

『今だつたら、桃太郎ちゃんも、きつと行くでせう。』

『モチちゃんのゐなか——幼稚園ある?』
『ありませんわ。』

『だったら、行けないぢやないか。』

『さうね、それぢや、お爺ちゃんとお婆ちゃん、みんなして東京へ引越して来ませうかねえ。』

『お芋ちゃんとタマ〜を一杯、籠の中に入れて?』

『さう〜、それから、どつさり人參や牛蒡をもつて、……』

『琴子、おネギ嫌ひよ。』

六

イノチヲ オタスケ クダサレシ オレイゴコロニ サシダシタ キンギンサンゴ アヤニ
シキ クルマニツンダ タカラモノ ソレヒケ ヤレヒケ エンヤラヤ

『御覽なさい。——こんなに澤山、南方の戦果を積んで来たわ。』

『ワんちゃん——車屋ちゃんみたいねえ。』

『おサルさんがヨイショ〜つて、あとを押してるでしょ。』

『キジちゃん——何してんの?』

『ワんちゃんとおサルさんと二人が、りでも重いもんだから、綱をつけて引張つてるのよ。』

『桃太郎ちゃんのお手々にあるの、なアに?』

『日の丸のお扇子……鬼ヶ島に敵前上陸した時、三十六貫もある鐵の棒をヲガラのやうに、軽々とビユウ〜振りまはして暴れる鬼の大將に向つて、チョン〜チョンとあしらつたのが、この扇子よ。』

『あ、ちようか。——こつちの赤いの、なアに?』

『それ、木の枝みたいだけど、珊瑚よ。——こないだ、アメリカの大きな航空母艦を二隻も撃沈させた上、米英の戦艦や甲巡をウントコサヤツつけた、あの邊で獲れたのかも知れないわ。』

『こゝに積んであるの——配給の玉葱?』

『あら、勿體ない! それは寶珠の玉よ。』

『割ると、中からおゼゼが出てくるのね。』

『まア……誰が、そんなことをしました?』

『お母ちゃん——おブコへ行く時、こまかいおゼゼがないつて、パチン、やつたわよ。』

『仕様のないお母ちゃんねえ。——子供の教育上、よくないわ。』

クニヘカヘレバ　ヂイサンハ　バアサン　トモニオヨロコビ　アツバレ　デカシタ　モモタ
 ラウ
 イヌ　サル　キジモ　ゴクラウサン　マツハ　チンジユノ　オヤシロヘ　オレイマキリヲ
 イタシマセウ

『モチのみなかなら、八幡さまよ。』

『琴子だつたらば?』

『氷川さまでせう。』

『チンガボールが落ちた時も、みんなと一緒に رفتたわねえ。』

『さう〜。』

『それからサ、あのサ、クペロラちゃんのお姉ちゃんと、くす餅、喰べたわねえ。』

『もう、いゝわよ、そんなこと……早く歸りませう。』

『どこへ?』

『桃太郎ちゃんのお家よ。』

『なんで?』

『まだ歸らないんぢやありませんか。——何よりも眞ツ先に、お宮まゐりをしたのよ。』

『あ、ちようか。』

オミヤヘササゲタ　タカラモノ　ミンナ　ホウナフ　シテシマヒ　キレイ　サツバリ　ミモ
 カルク　イサンデ　オウチヘ　カヘリケリ　日本一ノ　モモタラウ

『只今ツて?』

『さう〜、桃太郎ちゃんはサツパリした歸還の勇士だわねえ。』

『男の子?』

『なアに、今頃、そんなこと……』

『女の子だつたらば、ワタチね。』

『……』

『男の子だつたらば、ボクでしよ。』

『えゝ、さうよ。』

『だからよ、桃太郎ちゃん——ボクがゐなかつたので、お爺ちゃんとお婆ちゃんとか、さびしい〜ッていつてたでちようねえッて、いふないかねえ。』

『そんなこと、いはないわよ。』

『なんで?』

『日本の老人は、そんな女々しいことを、いはないッてことを、ちやアんと、桃太郎ちゃんは知つてるんだもの。』

『ふーん……』

『琴子ちゃんのお母ちゃんだつて、お父ちゃんがお留守でも、淋しいなんていはないでしょ。』

『いふないわ。』

『琴子ちゃんは?』

『アタチだつて、いふないわ。』

『なんで?』

『日本のコドモなんだもん……』

船だ・鐵だ・石炭だ!!!

まだ乳呑み兒の外に、四歳の女の子を伴つて來ると、その二人の世話にかまけて、自分の身軀なんかロクに洗ふ暇もないのを、おプロの小母ちゃんが氣の毒に思つたのか、一足先きにあがつて來た琴子に、お洋服を着せてやりながら、

『お母ちゃんが大變ですから、こんどはお父ちゃんといらッしやいね。』

と諭すやうにいふと、

『お父ちゃん——ゐない。』

琴子はアツサリしたものだ。

『あら、兵隊さん?』

『チヨウ——満洲、お國のためよ。』

『さうですか。——そりや御苦勞さんね。』

『だから、琴子——この次はおチエンチエコちゃんと来るわ。』

『えッ、だアレ?』

『チエンチエコよ。』

おの字と、ちやんが抜けたので、なほのことわからなくなる。

午後四時が口開けの、割に静かな頃合ひであるが、そのヤリトリが男湯の方までハツキリ聴えるわけではない。

然し、私の耳には、

(ははア、琴子の奴——何かおしやべりしてるナ。)

その程度には、わかるのである。

(さては、うちの連中もおれのあとを追つて、直ぐに來たものとみえる。)

うるさい奴等にとつつかまらない間に、早く脱出するにしかずとばかり、そゝくさと兵兒帶をしめて、下駄をつツかけながら、番臺の錢箱の上に、かねて用意の一山三錢をつまんで、

『お釣り——貰つて行きますよ。』

なるべくお互ひに手敷をかけない主義の私が、勝手にサヨナラしようとする、女湯との仕切り扉が開いてゐたので、ちらと見つけた琴子が、

『あッ、チエンチエコ!』

勇んで叫んだらしかつた。

私は聴えない振をして、外へ出てしまつたのだが、あとの話によると、

『あれ——お父ちゃん?』

おプロの小母ちゃんの間ひに答へて、

『違ふ、違ふ。——チエンチエコよ。』

『あ、先生!』

『チヨウく。』

『それちや、お醫者さんね。』

『違ふ、違ふ。』

『辯護士さん?』

『チヨぢやない。——チエンチエコだつてばア……』

琴子は頼りにじれッたがつたさうだが、お父ちゃん即ち先生と早合點してゐて小母ちゃんには

一向に吞込みかねたのも尤も千萬であらう。

第一、丸刈のイガ栗あたま五十年の私が、安全剃刀を顔にあて、寒氣骨を刺す嚴冬の候と雖も、湯あがりの全身にザブ／＼と冷水をかぶり、若き血によみがへるハリキリ姿を大鏡に寫せば、われながら、まだ／＼孫などがあるやうに思はれないのだから、そこのお内儀さんなんか、私のことをチンピラ琴子のお祖父ちゃんに當るとは、夢にも考へ及ばぬのも、また無理ではあるま

す。それに、先生といふ言葉が頗る重寶で……世の常の家庭ならば、孫どもがお母ちゃんのお父ちゃんなんて、やゝこしい呼び方をしない限り、いやでもお爺ちゃんといはざるを得ない間柄でありながら、われらの社會には獨特の敬稱(?)があつて、文筆稼業に馴れぬ最初のうちこそは、何となく、足の裏がくすぐつたく感じられたが、いつしか年期を増すほどに圖々しくなりまさり、自分でも可笑しく思はないどころか、ひとり娘に婿を迎へて、二人も矢つぎ早に赤ン坊が生れてみると、これは洵に有難い呼名ではなからうか。

そして、この「先生」が更に子供らしい愛稱をも加味すると、おチエンチエコちゃんとなり、時と場合によつては、遠慮なく呼捨てにされてチエンチエコとなる。——これ、また是非もなき次第であらう。

閑話休題——そも／＼、この天神湯を家人どもに推稱したのは私である。

『少し遠いけど、一遍、行つてみる。——小判桶を腰かけ代用にでもしようものなら、ひどいケンマクで内儀さんが叱りつけるから……』

妙なところが氣に入つたものだと思召すかも知れないが、そして、あるひは女湯には必要のない話かも知れないが、さなきだに桶の少いのをかこち顔なる浴客の多い時、人もなげにカランの前を占據して、あの小判桶を引くり返したのに、毛むくじやらなる尻うちかけてゐる錢湯風景を、私は常に苦々しく思つてゐたのだ。

それとも知らぬ次の男は、たつた今まで、どこの馬の骨だかわからない奴が、悠々と腰かけ代用に使つてゐた小判桶で、おのれの顔を洗ふのだから、まつたく、やり切れんのである。いや、そればかりでなく、もう一人のお客に使へる桶が、可惜、尻に敷かれてゐるのだから、實に勿體ないこともある。

然るに、わが天神の男湯には、長方形の厚板に低い脚をつけた腰かけが、小判桶と同じ數ほど用意されてゐるのだから、それだけでも私の御意にかなふわけではないか。

ところが、もつとわが意を得てゐるのは、肝腎のお湯の熱いことだ。別に、私は江戸ッ子を氣取るつもりはないが、どつちかといへば、ぬるま湯は嫌ひなのである。それにも拘らず、いろいろの理由が相關聯してゐて、昨今の公衆浴場は甚だカロリーのあがらぬ湯が多く、而も休みがちなやうだ。

現に、私の家から一番近い錢湯などは、月二回の公休日を超越して、蓋を開ける日の方が珍らしいといつてもいゝくらいだ……但し、當節のお菓子屋さんとは大違ひで、實績とやらのある常連が裏口からコソ／＼と、やりたくてもやれない性質の稼業だけあつて、よく、あれでやつて行けるものだと、ひそかに感心したり、不便がつてゐたのだが、この天神湯を發見して以來、私は再び學生時代、いや、自家用の風呂桶のあれども、なきに等しきサラリーマンの昔に返つて、専ら錢湯の禮讚者になつたのだつた。

『あゝ、あの天神湯ですか。——あすこの家の人は、業界でも評判の律氣もの揃ひですよ。』

ひどく炭屋の大將の、いや／＼、今では東京××燃料小賣商業組合第三配給所長たる區會議員の賞め言葉によれば、かのお風呂屋さんの一族は全家をあけて職域奉公の誠をつくし、石炭やコークスの配給のみをアテにせず、朝も早うからモンペ姿の甲斐々々しいお内儀さんやら娘さんの總動員で、例のバタヤみたい箱車を引いて隨所に現はれ、燃えるものなら何でもござれと、蒐

集に骨身を吝まないから、あのお湯は、いつでも熱いのださうな。

そして、月三回しか休まないなんて、今どきには珍らしい勉強なので、あたり近所から非常に感謝されてゐるといふ。

(成程、さうか。——道理で、萬事に行とゞいてみると思つた。)

私も感心して、家人どもに推稱したのだが、わが娘の喜代子はオイ・ソレと氣が進まなかつた。

『いくら何でも、一遍、うちのお風呂へ入つてからでない……』

これは妙ないひ草だが、子供を二人も抱へてゐると、その中のどつちかしらが、ヤレ風邪を引いたの、種痘を試みたのと、故障が起りがちなので、自分とも／＼三方お揃ひで健全な日は、案外すくないことにならう。

おまけに昨今の錢湯は、うまい時間を狙つて行かないと、まるで芋を洗ふが如き賑やかさを呈するので、氣の弱い連中は二の足を踏み、三度が一度となるらしい。

うちの喜代子もどうやらその口とみえて、何やかやの都合で延び／＼になつてゐるほどに、はや一月も御無沙汰してしまつたので、手足や襟首がどす黒くなり、その垢をおとすための錢湯ではあるが、もう少しきれいにしてからでないと、他人さまの前に恥しいといふのであつた。

そこで、私の家ではお隣りさんからバケツに一杯の石炭を、特に割愛して頂き、正月以來の風

呂をたて、そして、更に一週間の後、やうやく彼女たちが天神湯へ初見参に及び、そのおブコの親切な小母ちゃんに、

『お母ちゃんが大変ですから、こんどはお父ちゃんといらっしゃいね。』
琴子が諭されたといふ経緯なのである。

三

既に御明察の通り、私の家には風呂桶がないわけではなく、たゞ石炭の配給が非常に遠のいてゐたゞけの、極めて簡単な理由によつて、お湯をわかさなかつたのだ。

それならそれで、私なんかは兎も角も、二人の子持ちとはいへ、まだ二十代の若い身空の喜代子たるもの、いくら旦那さまがお留守だからとて、もう少しは女の嗜みとしても、せめて三日に一遍ぐらゐは銭湯へ通つて、然るべきであらうと思ふのだが、彼女の心境としては、道成寺の文句ぢやないが、誰に見しよとて紅かねつけよぞ……かも知れない。

いや、ことによると、彼女は風呂が嫌ひな性分ではないかと、思召す方があるかも知れないが、どういたしまして……今から二十数年前、彼女が呱呱の聲をあげた時、産湯をつかはせるに當り、まづ第一に、生れたてのお顔をブルンコさせられたさうな。

これは私のおふくろの指金で、

『かうやつておくと、風呂嫌ひにならん。』

人間萬事、初めが肝腎といふお呪禁であらう。

それかあらぬか、うちの喜代子は幼にして風呂を好み、一日に何遍入れてやつても、決して遁げまはらないばかりでなく、いゝ加減に出ようとすると、なか／＼に承知せず、寧ろ納得させるのに骨が折れたくらゐだつた。

これと似たもの夫婦が、即ち婿どのである。——まだ會社づとめの頃なぞは石炭も豊富にあつたので、一日でも風呂をたてないと、脊中が痒くて、どもならんなんて贅澤をいひ、週末にはお揃ひで近くの温泉へ出かけ、一體、いくら俸給を稼いでゐるのか……およそ算盤を超越した真似をしてゐた。

さうかと思ふと、頗る計算の細かいところもある。——毎朝の出勤に際して、まづ新宿で省線の急行に乗換へるべく、七番線から三番線へ階段の昇り降りに何分かゝり、東京驛から地下道を通つて行くのと、路面を横断するのでは一分二十秒の差があるとか……ギリ／＼一杯の制限時間までネバつて、おゝ、まだ、その頃は瓦斯ストーブも健在で、ラクダのシャツをあぶりながら、新聞を読むでもなく、ひどく寸陰を吝んでゐたものだ。

そして、ハンケチ一つ自分では洗つたことのない男だつたが、今や時と處が變つて來れば、北滿警備の一員として〇〇の野に立ち、寸暇あれば則ち洗ひものにいそしみ、戦友諸兄から「洗濯兵長」と謳はれてゐるさうな。

さういふ噂を聞くにつけても、われら銃後の護りは一段と緊張せざるを得ないわけで、來るぞ、來るぞの掛け聲を耳にするだけの石炭が、一向に姿を見せないからとて、ペーパープランの配給機構がどうの、かうのと生半可な口はきゝ申さず、最近に及んで、待望久しき現物が約三十キロ割當てられても、それは一旦緩急ある場合に備へ、黒ダイヤ大明神と崇め奉つて、嚴重に風呂場の奥の院に納ひ込み、初めからないものと思へば、一週間に一二回の錢湯で、結構この上もない生活になつて來たのである。

かくの如く、切りつめた上にも節約し得た石炭は、もつとく有効適切な生産面に、供給を豊富にして頂きたいといふのが、われら念願の筋でもある。そして、誰しもいふことであり、もはや世間の常識となつてしまつたが、何よりも船を澤山つくつて貰ひたいのだ。

『この前の世界大戦の時には、アメリカや一ヶ年に四百萬噸からの戦時急造船を拵へたが、これらも全米ドックの總動員をすれば、今まで沈められた總噸數を、充分に償つてお釣りが來るつて、ベルトの緩んだおっさんが豪語してゐるさうだ。』

私は喜代子に知つたか振りを試みた。

『英國では？』

『植民地の造船事業を極度に擴充して利用する方針だとさ。』

『ほほほ……出來ない相談ね。』

『どうせ折角、拵へたところで、遅かれ早かれ、また沈められるんぢや、およそ意味ないつて、造船所のカン／＼虫がリベットを打ち込みながら、ブツ／＼いつてるだらう。』

『まつたく、お氣の毒を青寫眞に撮つてみたいだわ。』
 翻つて、わが國や如何？

四

船は南方への天の浮橋だとある。

されば、去四月三十日の總選舉で出て來た翼賛議員諸公の、初顔合せを兼ねて開かれた五月末の臨時議會は、さながら「船の議會」といつてもいゝくらゐ、計畫造船法案に終始したのであつた。

こゝで再び知つたか振りをすれば、その主眼は貨物船を急速に、而も大量に造ることに外なら

ない。——それに要する資材が圓滑に整つても、龍骨が据ゑられてから進水までに半年はかかる。これを一定の戦時標準型にして、あらゆる方面の能力を活潑に働かせると、二三ヶ月に短縮することが出来て、それで餘力の生じた造船臺を高度に利用し得る勘定である。

『そのお船にしたつて、鐵で造るんでせう？』

『さうさ。——狸の泥舟どろぶねからヒントを得たらしいコンクリートの船にしたところで、やはり鐵材は要る。』

例へば、やがて轟沈されるとも知らず、アメリカでセツセと建造してゐる三萬五千噸級の戦艦には、七百四十四萬貫の鐵と、二十四萬二千六百四十貫の銅とを必要とする。と説いて聞かせたら、喜代子の奴——途方もないことをいひ出した。

『それぢや、この春の回收運動の時に献納した出刃庖丁が、何本ぐらゐあつたら賄へるのかしら？……』

『冗談いふなよ。——相手は三萬五千噸の軍艦だぜ。』

『それにしたつて、勘定の出来ないことないでせう。——あの庖丁が一本五十匁あるとして……』

『うん、そりや、さうだ。——七百四十四萬貫を五十匁で割ればいい。』

厄介なことになつたが、これも科學する心の一端だらうと觀念して、おそろしく零の多い割算

を試み、十四萬八千八百といふ商しやうを得た。

『案外、少しね。』

『うん……待てよ。あッ、いけねえ、いけねえ！——貫目は千匁ちんぼだつたナ。』

『さうよ。』

『それぢや、もう三つ零をくつつけないと、五十匁とのバランスがとれねえや。』

結局、一億四千八百八十萬本の出刃庖丁がありさへすれば、アメリカ式三萬五千噸級の戦艦一隻が出来るとなり、ナニ、大したことぢやないと、われら父子かみこの議は一決したのである。

爾來、私は一億四千八百八十萬本の出刃庖丁を振りまはして、ひどく頭腦明晰を誇つてゐたが、あたまのいゝ奴にも、上には上があるもので、

『そんなに要るもんか。——五百本もあつたら澤山だ。』

嚙んで吐き出すやうに斷言した男がゐた。

『えッ、君——一本五十匁の庖丁だぜ。』

『さういふ數量的の計算にこだはるのが、即ち米英思想に侵されてる證據だよ。』

『ふむ……然し、僅か五百本で澤山だとは？』

『要するに、その三萬五千噸の戦艦を、こつちのものにすればいいんだろ。』

『そりや、さうだ。』
 『それなら、君——五百人の決死隊が出刃庖丁を逆手に握つて、その艦の中へ躍り込んでみたまへ。』
 『ふん、成程!』
 『彼等は忽ち両手を舉げて、Z信號の代りに、白旗を掲げるだらうぢやないか。』
 『いや、どうも……痛快な造船計畫だね。』
 『さうさ、君——魂の問題だよ。』
 これには恐れ入つたが、若干の考へさせられるものも、なきにしもあらずである。

五

かういふ工合に、船は南方への天の浮橋であり、船には鐵が絶対に必要であると叫び、それらの原動力であるところの石炭を節約いたすべく、われらは自家用の風呂桶なんか、百年ほつたらかして、乾干にしても構ひませぬと、機會ある毎に力説してゐると、恰も、その聲に響あるもの如く、産報から電話がかゝつて來て、わが重工業の心臟地帯たる北九州へ行つてみぬかといはれたのである。

これは洵に願つたり叶つたりの「渡りに船」だ! 實は去年の夏、文藝統後講演で日立鑛山を訪ね、その製鍊所で出來たてのホヤ／＼の、ウツカリすると金粉が掌にくつきさうな光まばゆき金塊……十萬圓ほどのものを、ほんの一瞬ではあるが、現實に握らしてもらひ、ニヤリと笑つたことはあつても、石炭山の方はまだ見ぬ世界であり、技術的に非常な努力の結晶である可鍛鑄鐵の總本家・戸畑鑄物(日立・戸畑工場の舊稱)にも、その昔、私がヤリクリの激しい貧乏な製鋼會社の社員だつた頃、支拂手形で迷惑をかけたやうな氣もするので、古い記憶力の強い元老がゐたら、お詫びかた／＼水に流したいし、日鐵・八幡にいたつては、われらの小ツぼけな工場とは比較にならず、せめて千噸爐の湯の出る壯觀だけでも、百聞は一見にしかずと思ひ、二つ返事で引受けたのであつた。

かくて、先月の初め、日産化學・遠賀鑛業所の客となり、まづ炭坑の稼働者諸君のザツクバラシな座談會に臨んだ。——その會場としては、まだ新築して間もない勞務會館とでも稱すべき、廣い和風の大きな部屋が當てられ、相會するものは分隊長以上の役付き十數名……得てして、かういふ席に出ると、沈黙を守りがちの人が多い傾向のあるものなのに、こゝの方々は必ずしも然らず、なか／＼ほんとのことを仰しやる。

若い勞務課の社員が、

『昨日、ちよつと獨逸の炭礦の事を書いた本を読んだら、あつちには——坑夫の如く高邁なれ！
といふ言葉があるさうだ。』

ヒットラーとゲーリングだかど激勵に地下へもぐつて行くと、われ／＼の方は何も心配することはないから、専ら地上の作戦に全力をあげて下さいと、逆にハツバをかけられたといふ。

『われ／＼だつて、あんまり自分自身を卑下する必要はないと思ふんだがナ。』

すると、俳句などをモノする安全燈の係の人が、
『こんなものを作つてみました。』
と、私にメモの走り書を渡した。

男兒挺身入_レ礦内

神聖勤勞豈無類

振_レ地底鶴嘴太刀

報國精神不_レ劣兵

『成程、成程！ この意氣ですね。』

私は感心せざるを得ない。

すると、前月御差遣の入江侍従に、わが體驗を申上げる光榮を擔つたKさん——父子二代の炭坑稼働者として代表的の人物が、つく／＼と時勢の推移を述懐するのであつた。

『私なんか親からの炭坑夫ですが、以前は前科の一つや二つは有つとつて、刺青でもしとらんと一人前の扱ひを受けられんくらゐでした。』

尋常一年以來の級友で、無疵なのはKさん一人だけ……あとの面々は、今でこそ、どこそこの炭坑長などに出世してゐても、前身を洗へば曰くのある人が多く、荒ツぽい礦脈の流れる遠賀川沿岸に働く男には、川筋といふ異名が與へられてゐるさうな。

『大正十二年頃、八幡の（製鐵所の）職工さんといへば、身元調べをせえでも、娘を呉れたもんです。——炭坑のものも、さうなりたいたですワなア……』

『でも、近頃は、いゝんでせう？』

『そりや、町の工場よりは信用がありませうテ。』

『ところで、みなさん——かうやつて、一生懸命お働らきになつてゐて何が一番の楽しみですか？
あがり酒ですか。』

私は教はりたての炭坑用語を早いとこ使つて、自分の田へ水を引いた。——あがり酒とは、八時間の激しい稼働を無事に勤め、坑内からわが家へ歸つての、まづ一杯のことである。

『いや、金を貯めることです。』
 さつき漢詩を示された安全燈氏が、實にハッキリと申された。
 そして、これには共鳴する人が多く、それといふのも、自分の過去に顧みて、わが子供の教育だけはミツチリ仕込みたいのが、最大の目的であつて、いたづらなる守銭奴ではないのだから、こんどは私自身の實績に鑑みて、おのづと頭が下つたことである。

六

實は、この産報の旅に出る前に片付けるべき原稿が仕上がらず、汽車の中に持ち込み、名古屋あたりから急送するつもりであつたら、隣席の人のところへ押しかけて来た四十男が、大變な國際的情勢にあかるいらしい論客で、頗る談論風發……傍に人なきが如く、いや、人がゐるからこそ、聴えよがしに饒舌姦しい消息通なのかも知れないが、お蔭さまで、こちとらは虻蜂とらずの馬鹿な目にあひ、九州へ来てからは、お晝休みの工員諸君へ一席辯じ、あとは夕方まで工場見學——そして夜が座談會といふコースなので、なか／＼に纏まりかねてゐた。

然し、さうばかりもいつてゐられないので、その夜は社員倶楽部の厄介になつて十二時近くまで頭張り、どうやら脱稿したのだが、翌朝四時の起床は、ナニ、平常から鍛へてゐるから、さう

辛いとも感ぜず、借用の坑内服に身を固め、巻ゲートルに地下足袋を履いた姿は、見る人によつては、お菓子屋さんの轉業報國隊と思はれたかも知れない。

ところが、その日のわれは朝靄を衝き、颯爽として高松炭坑の廣場に現はれ、安全燈を頭上にかざした××名と共に、五時半のラジオ體操のあとを承け、まづインキの香高い朝刊の、着いたばかりの新聞に載つてゐる大本營發表を読みあげ、そして一場の激勵を辭を送つたのである。

大本營發表（五日午後五時）

帝國海軍部隊は、特殊潛航艇をもつて、五月三十一日未明、マダガスカル北端の要港デエゴ・スワレズを奇襲し、英戰艦クキーン・エリザベス型一隻、並に英乙巡アレスーサ型一隻を撃破せり。

大本營發表（五日午後五時十分）

帝國海軍部隊は、特殊潛航艇をもつて、五月三十一日夜、濠洲東岸シドニー港を強襲し、港内突入に成功、敵軍艦一隻を撃沈せり。本攻撃に参加せるわが特殊潛航艇中、三隻未だ歸還せず。

又しても打ち樹てられた皇軍の大戦果であります。御承知の通り、シドニーは濠洲第一の要港であり、マダガスカル島は日本内地より遠く印度洋を隔て、約七千海里……シドニーは赤道を超えて遙か南、約四千五百海里のところにあります。即ち、わが海洋作戦が如何に雄渾無双な規模において展開されつゝあるかは、容易に想像されるのであります。

そも、このマダガスカル島は元來がフランス領でありまして、日露戦争の時は例のロシヤのバルチック艦隊が永いこと、その島に愚圖々々してをりまして、問題となつた因縁附きの島であります。

ところが、その頃といたしましては、初めて聞いたやうな南アフリカ沿岸の島でありますので、當時の新聞記者としては耳新らしく、ある地方の新聞では——敵の艦隊は、まだカスカル島にあり。カスカル島といふ島に、まだ愚圖々々してゐると報じ、同業者間のお笑ひ草になつたことがあるのであります。

かやうに、土地の名と申しますものは、時に愛嬌のある間違ひを惹き起しやすいためあります。が、われ／＼日本人同士の間では、無條件で通用するお伽噺なぞも、國民性が違ひますと、なかなか受入れられないのであります。——現に、マレー半島にまゐりますと、住民たちが馴らして椰子の實を集めさすのに重寶な猿がをりまして、これを椰子猿と申してをりますが、そのほかに

も木登りの上手な蟹がをります。さういふ木登りの上手な蟹がゐたんでは、お伽噺のサルカニ合戦は成立いたしません。

然らば、桃太郎は如何かと申しますと、これも滿洲には不向きださうです。私は滿洲といふ土地へは、一度も行つたことがないので、よく存じませんが、新京なんか一望千里の野ツ原に計畫された平らかな都市なので、

オヂイサンハ ヤマニ シバカリニ

といつても、山といふものを見たことのない子供には理解が出来ないらしく、

『山ツて、どんなところ？』

と訊くさうです。

そこで、大人も説明に困つて、高いところだと申しますと、

『あゝ、ビルディングの天邊か。』

これは、われ／＼仲間の中でも一番モノ識りの、高田保といふ男の滿洲みやげでありますから、御信用になつてよろしいと存じます。

それから、サトウ・ハチローといふ男……これも器用な先生で、大人の讀んで面白がるユーモア小説のみならず、子供の悦しがる愉快な物語も書きますが、この人のお父さんが佐藤紅緑先生

であります。

この先生が今年のお正月に「南方攻略」と題しました書初めの句に、

初がすみ 犬猿雉子の 車かな

といふのがあります。——洵に南方攻略にふさはしい俳句であります。この車は即ち只今の時局と照應いたしますと、船でなければなりません。

そして、車に積んだ寶物——金銀珊瑚綾錦とは、果して何を意味するでありませうか。……あのひはガソリンであり、錫であり、ゴムであり、砂糖であるかも知れません。それは解釋する人によつて、各々お説が分れませうが、兎に角、それらの南方資源を確保する上において、どうしても船の必要なことは、今更らしく私が申上げるまでもありません。

然らば、船は何で造るか!? 勿論、鐵が入用であります。その鐵は何を使つて出来るか。船を動かすものは何か。電氣を起すものは何か。——みんなあなた方・産業戦士の汗の結晶であります。

われ／＼消費地に住むものも、その邊は充分に心得てをりまして、假令、一かけの石炭と雖も、決して無駄にはいたしてをりません。

どうぞ、みなさんも、その邊をよくお含みおきの上、愈々益々御奮闘あらんことを切望いたします。

ます。——これから、私も地下二千尺の坑道を、お邪魔にならないやうに降りさせて頂きます。

——では、みなさん、御安全に……

作者附記——この「御安全に」といふのは全國一般に使つてゐる産報用語で、坑内などで行きあふ時、双方から「氣をつけてらっしゃい」といふ意味の挨拶です。

これでも重役？

大正の御代から昭和へうつる歳末の二十八日もあつたでせうか。——僕がサラリーマン時代同じ会社に勤めてゐたNへ電話をかけました。

その会社といふのが、完全に某財閥のものとなつてからは、自然に舊社員はお拂箱……それぞれが僅かばかりの退職手当を局面展開資金にして、人生のスタートを切り直さうといふ非常時でした。

それで、僕は學友がやつてる思潮社と稱する出版屋へ合流したのですが、

『新潮社のンが抜けてるだけあつて、どうも、こいつは縁起がよくないぞ。』
既に、その頃からして駄洒落の癖はソウトウなもので、文學青年あがりの佐藤義亮が新潮社の

經營に成功して、巨萬の富を致した努力もさることながら、あれは姓名判断から論じてもしンチヨウ社といふのだから、確に運の字に乗つてゐる。然るに、わが思潮社はンと刎ねる發音に缺けてゐるではないか。

僕は一應ケチをつけたのですが、印刷屋から轉向した友人は、

『今更、そない無理いふたかてあかん！、まんだ、僕等は若いんやで、毛利元就の遺訓みたよに努力しようやないか。』

そして、これも級友の麻生久の著はした「無産政黨とは何ぞ」といふ單行本を發行し、ついで小生の「虚業春秋」と題する一巻で、大に當てようといふのでした。——當時鐘紡社長をやめて實業同志會をつくり、政治運動をも始めた武藤山治が「實業讀本」で、百萬の讀者を獲得したと聞き、

『あんなマトモなことをやつてたら、ほんとの金は儲からん。』

現代社會は須らく虚業の世の中であるといふのが味噌で、彼氏の「實業讀本」の三分の一賣れでも三十萬……ちよいとわるくないナと大變な意氣込みでしたが、當てことと何やは見事に向ふから脱れて、成績甚だ芳しからず、さんぐのテイタラクです。

かゝる折柄、大正が昭和へ改元——そこで、僕は今までの既製傳票や封筒その他の印刷物の年

號を訂正するゴム印が賣れるだらうと考へつきました。

『早いもの勝ちの商賣で、儲けは細かいけど、必要な可成りあると思ふんだが……』
その相談を試みようとして、元の會社の購買係で、當時は同僚と工具のブローカーNH商會を
やつてゐる男へ電話をかけたところ、

『只今、ちよつと遠くの方へ出張してませんで、殊によると年内には歸りがどうかと思はれま
す。』

『ははア、大晦日を通げる策戦か。』

『冗談でせう。——大きな見積りがありまして、東北のAへ出かけてるんですよ。』

留守番のHは萬更の虚勢と思へない鼻息でした。

かくて、販賣方面に自信のない僕の改訂昭和版のゴム印は流産です。——あとで聞くと、この
手は明治から大正になつた時、相當に當りを示した人もあつたさうですが、いくらでも簡單に製
造能力の豊富な當時、一晩で十萬本オンの字とあれば、忽ち値段も崩れるのが當然——下手にや
つたら、ひどい損ものであつたらうといはれました。

二

やがて、諒闇の昭和二年の正月です。——年賀缺禮の春は東京の街も静かでした。

『よう、どうだい——何か大きな註文があるつてぢやないか。』

Nの家を訪れて、さう訊きますと、彼は女房の合の手にA歸りの土産話をいたしました。

『東北といふところは、まだ——開拓の餘地がいくらでもありますね。』

『一體、何の見積りに行つたんだい。』

『鐵橋ですよ。』

『そいつは大きいね。——工具屋としてはレコード破りの仕事だらう。』

『え、ドリル一本の註文で有難がつてゐた日には、嫌アに春着一枚買つてやれませんからね。』
なか／＼いふことがハリキリです。——勢ひ細君も氣が大きくなつて、まこ魚の足を肴に一本つ
けることになりました。

『あたしや、また鐵橋だつてから、いくら田舎でも、永代橋の孫ぐらゐはあるのかと思つてたら、
ツ—つてばカーで、いつの間に通つたかわからないみたいな、五間とか三間とかのが三つなんで
すツて……』

『それでも、取らないよりはいゝでせう。』

『ところがねえ、辰野さん——いつそのこと、その鐵道會社の面倒をみてやらうかとも考へてる

んです。』

『全頃、鐵橋を誂へてるやうぢや、まだ開通してないんだね。』

『そこなんですよ、問題は——』

Nの報告によれば大變にテンボが緩く、何年たつても汽車の走らない會社でした。

創立は大正十三年で、資本金は二十五萬圓の株式組織でしたが、A縣の△△山麓の山村を結ぶ九マイルが第一期線——人間を運ぶよりも、その附近の木村や米を積出すのが目的の、天狗鐵道といふ名からして愉快な存在でありました。

その第一期の社長が東京で少しは出世してゐる男らしく、

『足りねえ株は東京の連中に持たせるで、お前方は餘り無理しねえ方がえゝぞ。』

さなきだに、近頃の農村の人々は他力本願の傾向がある。そこへ、かういふ次第だから、

『それぢや、よろしく願ひしますだ。』

總株數五千株の内、僅かに千七八百株だけを土地の諸君が引受けて、あとは知らぬ顔の半兵衛で、自分達が一番お蔭を蒙ることの多い鐵道を敷かうといふのです。既に出發點に於て蟲がよすぎませんか。——それも實力のある社長なら、東京の然るべき方面へワタリをつけて、何とか消化することも出来たでせうが、まだそれほど的人物でもなかつたので、甚だ正體の怪しい名義

を並べて、どうやら、あとの三千二百株の辻褄を合せました。

おまけに、平取締役として乗込んだ俵がソウトウなおツちよこちよいで、どういふ關係か、時の陸軍大臣田中義一閣下を知つとると威張つて、その方面へ運動するとか何とかいゝ加減な行動を取ったかの如き口吻で、大臣官邸へ金魚鉢を持ち込んだみたいな計算が、帳面の上に記載されてゐます。

一事が萬事——こんな見當違ひをやつてゐては、金ばかり喰つて、肝腎の事業が一向にテキバキと参りません。

そこで、人のいゝ農村側の株主も、

『話が少し違ふでねえか。』

やうやくシビレを切らした末が、社長父子の引退となりました。

三

その後へ乗込んで行つたのが二代目社長——これがまた頗るのインチキ野郎で、押出しは尤もらしい白髪頭の老紳士だが、やることはなつてゐません。

『あなた方が私に誠意を示す一端として、現金を三萬圓ばかり調達なさい。——さうすれば、あ

との十五萬圓は私の手で拵へませう。』

丁度、その十八萬圓が今後に要する工事費だったので。

ところが、株主からは拂込ませる餘地がありませんでした。——僅かに路線が少し出来ただけで、早くも一株につき二十五圓づゝも絞つてゐるのですから、もう少し何とか仕事の目鼻のつかんことには、義理にもいへたわけのもんぢやありません。

そこで、止むなく村方の重役が田地を擔保に入れたり、無盡の融通を仰いだりして、兎に角、三萬圓の金策をいたしました。——こゝでも前回同様、自分達の利益になる仕事を、他人の禪で角力をとらうとしたのです。

『これで東京の奴等に全部責任を持たせるだから、なんと安いものでねえか。』

事實、責任を持つてくれれば、さういふことになりませうが、この二代目社長は久し振りに掘んだ金で、馬鹿な遊びを始めました。——大體が若い時からの蕩兒で、それが暫らく不如意の境遇へ御沈落だつたのに、降つてわいたやうなカモなんですから、浮氣の蟲が眼をさましたのも當然かも知れません。

そして、鐵道工事の方は全部、請負師へオンプしようとなつてたのでした。——その邊の經緯を知るや知らずや、わがNH商會の御兩人は工具ブローカーのくせに、鐵橋の入札を引受けて、ポ

ロい儲けをしようと、二代目社長乗込みにお供したのださうです。

『ところが、御承知の通り大變な雪です。』

のみならず、申すも畏き極みであります。大正天皇が崩御あらせられました。——それは大正十五年十二月二十五日の午前一時の御發表でした。

ところが電話のない村で、おまけに郵便局からは別配達の區域ですから、縣廳の公報が役場へ到着したのが、翌二十六日のお晝頃だつたとか申します。

『へえ、驚いたね。——これが北海道の山の中とか、樺太の露領近い漁場だとかいふんなら尤もだと思ふが、まだ本州にも、そんな邊鄙なところがあるのかね。』

『それだけに、一日も早く鐵道を敷いてやらなければならぬと思ひませんか。——人助けになりますよ。』

『そりや、さうだね。』

『あなたも仲間に入りませんか。——誰か貸借對照表なんかのわかる人はゐないかツて頼まれてるんですよ。』

やがて、Nの仲介で僕は二代目社長と會見いたしました。——彼氏は横濱に家がありました。それも細君名義の素人下宿をやつてるところへ、居候といった身分です。

『若し、私が前科者であつたら、どうしますか。』

これが僕に對するメンタルテストの第一でした。

『そんなことに拘泥する必要はないでせう。——問題は現在です。』

そして、僕は柄にもないロングフェローの詩を引用しました。

過去をば過去に葬りて

未來をたのむ事もなく

たゞ現在に働けよ……とね。

『あゝ、さうですか。それちや、私の身の上話をいたしませう。』

生れは越後の小千谷あたりであるらしく、學校は中學もどうかと思はれますが、若い時からの苦勞はソウトウなもんださうで、可成り大きな仕事をして來た人物だとか。

『私は法律は知りませんが、それでも決して引ツかゝるやうなへまはやりません。』

乞ふ、意を安んぜよといつたみたいない口吻でした。

やがて、天狗鐵道東京出張所といふ看板が、銀座裏に掲げられました。——その東京勢といふ

のがNH商會の御兩人の外、三人は横濱方でなか／＼の猛者ぞろひです。

この仕事を持つて來た先生は第一の功勞者でもあり、測量のことともわかるので技師長に納まりました。——明治前半に勇名を轟かした××伯の御落胤とか。……その割に人品骨柄が安ッぽいではないかと、いさゝか疑念めいたところを、遠慮なく一發試みてみますと、

『そりや、さうさ。——おらア飯炊き女中にお手がついて出來た子だもの。』

されば伯爵家への出入りを憚り、全然交渉を持たないので、いつも小錢に不自由してゐるとも申します。——これは掛引のない言葉でした。

それから庶務課長といふのが、米國はオークランド高等商業出身とあります。——實際は郵船の司厨くづれで、若い頃は帝國ホテルに勤めてゐて、その御近所にあつた辯護士の女中との仲もよろしく、お嬢さんを抱いては油を賣りに來たものださうです。

『そのダシに使はれた令嬢が、後年の帝劇女優森律子とはキリストも御存じないでせう。』

もう一人は老技師で、若い頃を北海道の鐵道工事に従ひ、官を辭した時は高等官だつたと、自筆の履歷書に書いてありました。そして、酔へば往時の北海道で活躍した舊友を語り、吉植君といふのが農村歌人で代議士の吉植庄亮さんのお父さん、東君とあれば現政友會の重鎮東武先生のことらしいです。

『なアに、履歴書なんか派手に並べとくことだよ。』
 社長がこの意氣ですから、技師長なども一高中途退學になつてゐる筈で、元鐵道次官××氏の家に寄寓せしことありも、見る人が見ればなかく意味深長ではありませんか。

五

かういふ連中がA縣の山の中へ繰込んで行つたのですから、村の衆は驚きました。それでも、堂々と鉄入れ式といふのをやつてのけ、技術屋は人夫を使つて、連日の測量です。われ／＼文官連は役場の出納簿みたいな古い帳面から、會社創立以來の收支計算の再検討です。やがて、臨時株主總會といふものが開かれますと、僕も正式に取締役の一員に加へられました。——これからが所謂「僕の重役時代」なんです。内幕はイヤイヤ……汽車が走るやうになつて、いよ／＼開業の暁までは、他の社員諸君と均一の月手當七十圓で我慢する申合せでした。まつたく、小生が獨身生活の下宿屋住ひだから、それに甘んじてゐられたのです。果して然らば、何故そんな算盤に合はぬ重役業者になりつるか……曰く、親孝行！
 『どうやら、お前も重役になつたか。』
 たつた一言——オヤチにかういつて貰ひたかつたのであります。

うちのオヤチが地方廻りのシガない官吏でありながら、相當に無理をして官學の大本山帝大法科へ入學させたのも、實は自分が私立大學すら出てゐなかつた爲めに、浮草稼業の官界を遊ぶのにどのくらゐ損をしてゐたか？……屹度、これは鳥取縣時代の先輩白井番二さんのお父さんも、隣縣同志の親しさで、地方行政講習學會へ出向いて来て、多少は御懇意に願つたらしい、栃木時代の吉屋信子さんのお父さんも、何かの折にふれては同じ歎き(?)を口になさつたことがあるだらうと思はれます。——いづれも、今はなき制度の郡長を勤めてゐたのでございます。

ところが、小生は大の官吏嫌ひ……それに至つて氣の弱性質でもありましたので、あゝ、無論、只今でもさうですが、頻々として知らぬ土地へ轉任の都度、別な學校へ移つて變つた言葉を覚えるのは、まことにヤリ切れん苦痛だつたので、僕は一人で郷里茨城Kの町へ戻つて参りました。そこには祖母が女ばかりを使つて、勇敢にも質屋を営んでゐました。

こゝで小學校の二年間を轉校の心配なく過し、中學は遠州濱松で五年間を終始一貫——京都の三高から東京の帝大と進んだわけですが、その大學生の頃、まだ充分働けるのに、僕のオヤチは引退を餘儀なくされました。それが政變あつて内閣更迭のトタンに、天降つたらしいので、僕は内心フンガイいたしました。

(こんな田舎の隅ツこにゐる役人までも、その都度ビク／＼しなければならぬとは……まア、

何といふ住みにくい世界であることよ！
 僕が大學卒業後、オヤヂの意に反して官界を志望しなかつたのは、遠き原因がこの邊に胚胎してゐるらしいです。

さるにても、サラリーマンといふものは、いづこも同じ秋の夕暮であります。——學生時代を清算して實社會へ入りますと、最初に勤めた火災保險でも、お次の鐵工會社でも重役室へゴールインは九牛の一毛に過ぎません。

それを、怪しげな出版屋の共同經營から一躍、小なりと雖も株式會社の取締役に出世したといつたら、定めしオヤヂもお悦びであらうと思ひました。——かくて、小生は自分の身を安く賣る氣になつたのであります。

まつたく、親孝行は辛いといふものです。

六

それにしても、何といふミジメな重役でありましたらうか。——社長は村の旦那方から捲上げた三萬圓を元手にして、あれやこれやと有望な事業をやつてる間には、どれか一つが當つて、あと十五萬ぐらゐは儲かるだらう。それで鐵道を引いてやつたら、サギにもカラスにもなるまいと、

頻りに千三ツ屋を物色しては、有利な仕事を狙ひましたが、何しろ、久し振りで手にした大金は、遊びの方へ出るのが多いのですから、二萬や三萬は忽ちが當然ではありませんか。

然るに、彼氏は女を見ることに實に甘く、

『あれは私に氣があつてねえ……』

日米ダンスホールの踊子にも、その調子でいろ／＼のものを買つてやり、

『僕の女房が大變お世話になつてるさうだが、こつちの顔はどうして呉れるんだ！』

と亭主にネチ込まれたり、お手元も大分怪しくなつたので、

『ホロい仕事は大阪に限りますよ。』

さういつて出掛けたまふま、四五十日たつても大晦日が來ても、——ヨウスミシダイカヘル……といふ當然のことを片假名にした電報の名文が來るだけで、居所不明の手紙には、

『もう一週間の辛抱です。各員フンレイ努力せよ！』

なんて、えらさうな書き出しで、目下まとまりかゝつてゐる仕事に成功すれば、十萬圓は確實に入るから……これも一二回の間は効果がありませんでしたが、何度でもアンコールされると、女房や子供を抱へてゐる社員諸公がお氣の毒です。

『足代がなくなつたから、僕は當分、自宅籠城です。』

『さういつて、自分の家へ引込んでられる人は幸福だよ。——僕んとこなんか家主が隣りなんで、ごろ／＼してもゐられねえや。』

『うちでは鯉節のない味噌汁を三日つゞけてるが、およそ美味滋養でないね。』

イヤハヤです。——僕も重役として黙つてもをられませんから、身分不相應の工面をすることになります、まづたく進退行つて、A天狗鐵道東京出張所は、僕一人で孤城の落月を眺めることゝ相成りにけりです。

別に、これぞといつて會社の仕事はないのですから、諸君の顔が見えなくても、事務の澁滞を來す虞れはありませんでしたが、困つたことには、僕自身が下宿屋へも不義理が累なつて、歸れぬ籠の鳥……事務所の椅子を三つ並べて、その上へゴロ寝なぞといふ馬鹿な話です。

世間の常識から判断されれば、重役といへばフカ／＼した回轉椅子にフン反り返つて、葉巻をくゆらしながら官判を押しつゝ、ゴルフの歸りにはどこへ寄つて、酔ふては枕す美人の膝といった心境を楽しみ、どうしたらお腹がへるか、そんなことで頭の禿げる階級と思召す方々が多いでせうが、重役にもいろ／＼ござんして、

『彼は鐵道會社の重役であるさうな。——まことにお羨やましき人物でござる。』
必ずしも、そんなのばかりはゐないといふ見本に、ほんのチョツピリではありますが、その片

鱗を語る次第……お退屈さまでした。

貸衣裳は語る

およそ世の中は馬子にも衣裳である。況んや、馬子ならぬ身が沐猴にして冠すと嗤はれやうとも、男と生れたからには仁丹の登録商標みたいな金ピカ服に、威容儼然たる寫眞を新聞に出して貰ひたくもあらうし、鏡のない國から出て来たおたやんだつて、綺麗なおべに錦を飾つて、生れ故郷へ墓参りもしたいは山々なれど、先立つイトトが不如意とあれば、そこに何がな便利重寶な方法を案出してこそ、要領のよい一石二鳥式社會奉仕の一端でもあり、着想第一を尊ぶ金儲けの途ではあるまいか。

いつ頃から貸衣裳なんて稼業が始まつたか、本氣になつて調べてみたこともないが、恐らくは不祝儀御用達の葬儀屋の棺桶を納める片手間に、自分の女房の白無垢を御融通申上げたのが、算

盤づくの損料貸しと發展し、次第にお目出度い方面へ業務擴張したんだらうと、常識圓滿の仁なら尤もらしく思召すかも知れぬが、實際の事物起源はもつとお安くないところにあつたんだとか。

『えッヘッへ、實は手前共の恥は惚氣の稼業なんで……』

『ははア、惚氣ながら儲かるんでは、成程やめられませぬね。』

『お蔭さまで創業茲に四十年……永い浮世に波風立たず、思へば楽しい月日でござんす。』

『うわッ……いゝ加減にして下さう。』

『いゝえ、正直に懸値のないとこですよ。なア、婆さん——』

『ほほほ、あんまりほんとのことをペラ／＼やりなさんなよ。いゝ歳をしてさ。』

古い女房に窘められても、尙且つ昔戀しいお儂古をしたがつてゐるのは、帝都に散在する大小の貸衣裳店三十有餘軒の中でも、その元祖争ひに敗は取らぬと、手型いを自慢の鶴龜屋の老主人である。——彼氏、志を立て、郷關を辭した弱冠の頃は、一流の代言人たらずんば死すとも歸らじと、堅き心を玄關番に甘んじて、後の辯護士界の巨人某博士の法律書生を神妙に勤めてゐたが、木石ならぬ身の青春に恵まれれば、篠山生れの丹波男にだつて、煙草屋の二八娘は美しくも見えようではないか。

それからのくだ／＼しい経緯なんか、可笑しくて聴いちやゐられないが、兎に角、話の筋は發

展して、若き二人お揃ひの芝居見物といふ嬉しいことになるに及んで、男はヘタと困つたさうな。
『何しろ先生の厄介になつてゐる境遇ですから、その時分の私は紺飛白のお仕着が一帳羅で、さうした晴れの場所へ羽織つて出るものがございます。』

『そんなに洒落る必要もないでせう。』

『へえ、只今なら自分の着物でもお客様のお間に合ひますれば、遠慮なしに損料奉仕の方へ廻しを取らせて頂きますが、若い時はさうも参りません。』

『早速、貸衣裳屋へ駆けつけるテナ段取りですね。』

『御冗談で……その當時はそんな氣の利いた稼業なんか、一軒だつてあるもんですか。』

『成程、お店が元祖か。——それで、どうしました？』

『何事もザツクバラに相談する兄弟子から、銘仙の借着です。』

『ははア、可成りノツポのやうにお見受けしますが、それでよく寸法が合ひましたね。』

『つまり、私の運勢がよかつたんでせうナ。古参の朋輩も手前同様に七寸たツぶり着ますんで……』

『それぢや、まるで師走の十三日に笹や笹々、笹や笹、笹はいらぬか煤竹を……チ、シヤンの大高源吾は橋の上みたいですね。』

『どうしてですか。』

『餘りに尾羽打ち枯らした俳句仲間の見すばらしさに同情して、賣井其角が皮脱いでやる情景があるぢやありませんか。——ユキタケも丁度えへ……』

『あッ、違えねえ。手前も——あした待たるゝその寶舟ツてんで、前の晩はよく眠られませんでした。』

『ストップ！ あちらで老いたる彼女が羊羹を切りながら、噓をなさいましたよ。』

『オイ、婆さんや——チンと涙をかで、もつと厚く切つてもいよ。』

『さうですか。——むかし思へば涙がこぼれて、何が何だかわからないのよオ……』

『ははは、こりやソウトウなもんですね。』

二

俗諺に曰く——東京は日本の掃溜であると……或はほんとにさうかも知れぬ。

『何をお匿し申ませう。實は私の親も郷里を喰ひつめて、夜逃げの態で出て來たんでございますよ。』

『いや、それは寧ろ成功美談の第一頁として、決して恥しがるには及ばんです。例の目黒御殿の

千萬長者赤野藤一郎既に然り、福徳銀行の頭取福屋徳兵衛も殊によるとさうらしいッてぢやありませんか。』

『あら、それぢや肩身の狭い思ひをするに當りませんのね。』

『さうです。僕の郷里からも夜逃げ組で随分ガツチリしてるのがゐますよ。要するに人生は勝てば官軍です。』

『でも、私は未だにあの晩の心細さは忘れられませんよ。』

『お幾つの時でした？』

『九歳——』

『ははア、それでは一番いゝおべゝを着せられて、新らしい下駄を買つて貰ひましたね。』

『まア、よく御存じですこと……さては、あなたもその一黨ですか。』

『さうまでも買被つて頂かんでもよろしいです。實は、僕の親が郷里で小ツぼけな質屋を営んでますんで、そこは多年の稼業とでも申しませうか、一夜にして永年お馴染みの土地をドロロンなさいますお方のお仕度は、大抵見當がつくといつてました。』

『あら、まア恥しい。』

とばかりに、五十年前前の古事の氣まりを悪がつたのは鶴龜屋の婆さんである。——彼女の親

と限らず、苟も先祖代々の生れ故郷では、下駄の齒入れ屋に轉向も出来かねる仁が、廣い東京ならどんなに身を落してもと、七轉び八起きの實演を試みる爲め、本意なくも立つ鳥跡を濁してサヨナラ超特急の針路は、誰しも相場のきまつてゐるみたいで、傳來の位牌だけを唯一つ残して、爾餘のあななきかの家財道具を二東三文に處分すると、先づ何を措いても新らしい履物を奮發して、更に子供の晴れ着を受出すべく質屋へ廻るのが、貧しい中にも母性愛の表現であるやうだ。『大變失禮ですが、多分、あなたのお母さんもさうだつたんでせう。』

『えゝ、その通りでしたの。』

『何もお調子に乗つて申上げる次第ぢやありませんが、そんな工合ですと、天長節やお正月にも親御さんは苦勞なさいましたでせうね。』

『ほんとに、さうのやうでした。只今のメリンス……その頃は唐縮緬と申しましてね、あれが式のある時、學校へ着て参ります一番いゝ着物なんですから、お庫の御厄介になつてゐたんです、思ふやうに着られません。』

『御尤もですね。僕の家では利息だけ拂へば間に合はせて上げてますよ。』

『それは何でございませう。——一旦、元利揃へて受出して、翌日もう一遍入れ直すんぢやないですか。』

『いゝえ、萬事が信用づくですから、その月の利子も踊らないやうに、翌月の朔日附で帳面に載せます。』

『さうして頂ければ随分助かりますわね。生憎、私の郷里の質屋さんはトテモ頑固な店でしたから、そんな融通どころぢやございませんので、子供心にもかうした世話場に、僅かの料手で手頃な衣裳を貸して呉れたらと思ひました。』

『成程、さうすると、この稼業はあなたの着想ですか。』

『ハイ、いゝえ……私はたゞ昔の恥をお話し申上げただけですよ。』

『古い貧乏話を羊羹のお茶請で、召上されるやうになれば結構な御身分ですよ。』

『いや、さうでもありませんが、この稼業たるや、いはゞ二人の合作みたいなものでございます。』

と再び親爺が發言の機會を掴んだ。

『あ、左様々々——人情斬しに身が入り過ぎて、肝腎の主人公との觀劇ロマンスを忘れてゐました。』

『ははは、人間の合縁奇縁といふ奴は妙なもんですナ。——丹波篠山の法律書生が煙草嫌ひでしたら、こんな些細な貸借の債權を有難がつてないで、今頃は押しも押されぬ法曹界の老大

家として、堂々たる門戸を張つてるかも知れませんが、兎角、世の中に二つ續けていゝことはなすもので……』

『ちよつと待つて下さい。そんなものゝいひ方をされると、私ばかりが悪者みたいでお氣の毒さま……最初の間は喫めもしないけれど、一日に三度も煙草を買ひに來たのは誰ですよ?』

いくつ歳を取つても、この道は別であるらしく、婆さんは來客をそつち除けに、爺さんの方へ詰め寄つたので、どんなことになるかと思ふトタンに、ガサ／＼、ガサ／＼と低くはあるが、怪しげな音を立てるものがある。

『ありや何です、鼠ですか。』

『いゝえ、店の奴等が妬いてるんですよ。』

『へえ、番頭さんは小僧さんを伴れて錢湯へ出掛けたんでせう。』

『みんな着物ですよ。』

『キモノ!?』

『さうです。——一品づつ衣裳籠に疊んであるんですが、當節の呉服物は人絹混りなしなんてシロモノは勘うござんして、どうも衣ずれが下品で困ります。』

老主人の藤口を開いた鶴龜屋の衣裳達は、店の棚に積みかさなつて大憤慨である。

『禿茶瓶め、何いつてんのさ。自分で仕入れを値切つといて、人絹七三に不足のいへた義理か
よ。』

『ほんとにさうだわ。ねえ、みなさん！ まだ肩上げのレヴュー・ガールでさへ桃色争議を起す
時勢なんでも、われわれ籠の中の衣裳だつて、たまにはメートルを擧げて悪くないでし
よ。』

『異議なし！』

『賛成！ あら、駄目よ、そんなに押しちやア……仕つけ糸が切れるちやありませんか。』

『へえ、あんた、まだつけてんの？』

『だつて、あたし處女なんでも……』

『ほほほ、貸衣裳にそんなのがありますかッてんだ。』

『ありますわよ。あたしと一緒に松竹屋の大賣出しで見切り場から掘出された訪問着のお藤ちや
んなんか、仕立卸しの女給さんがトテモお氣に入りで、そのまんま翌日から身請けになつちやい

ましたわ。』

『どうせ月賦でせう。』

『それにしてもさ、羨やましいぢやないの。』

『まつたくだわ。あれは桐生の出だけど、ちよいと女好きのする變り裾の模様だつたよ。』

『さうなんですつてね、あたし、何にも知らない間に織り出されたもんだから、こんな流行らな
い緋に生れついちやいましたけど、當節のお客様には本場のよさはわからないらしいのね。』

『ふん——わたしや大島本場の育ち……か。お前さんの愚痴も久しいもんだよ。』

『あら、姐さん——いつお歸り？ ちつとも知らなかつたわ。』

『そりやさうでせうよ。——女の衣裳が三枚寄れば姦しいツてね。』

『ほほほ、そんなのあるかしら……随分早かつたのね。』

『藝妓のお披露目は宵の間だとさ。お、疲れた。膝頭が痛んでやり切れない。』

『察するわ。——藝妓衆やお茶屋の姐さんの着物はみんな膝が弱るんですつてね。』

『そりやモチよ。洋食皿の二三枚も持てれば、天晴れ銀座のナンパワン氣取りのお嬢さん方とは、
仕込みも違へばサービスも段違ひなんだからね。——立てば芍薬、坐れば牡丹、ヘアコリヤ〜
と……』

『まア！ いゝ御機嫌ですこと……まだお酒のシミが抜けないのね。』

『へッ、そんなことを一々気にしてたら、あたいの稼業なんか、一日だつて勤まりませんよ。あゝ、お座敷で殺してた酔が急に發して來たよ。ちよいと、染直しのお牛ちゃん……』

『いやだわ、姐さん——あんまりほんとのことではないですよ。』

『おほほほ、御免よ。お互ひさまだつたわねえ。——あの、いゝ妓だから、お冷水を一杯頼まれて頂戴！』

『……………』

『オヤ、生意氣だよ、半玉のくせに、……何故、はアいつて返事をしないんです。』

『だつて……旦那に叱られるんですもの。』

『どうしてさ？』

『衣裳の爲めに毒なんですつてさ。』

『大丈夫！ 憚んながら、そんな當世出來合ひの古濱さんとは、本縮緬の生絲加減が違ふんですからね。』

『へん、またお株が始まつたよ。いつものお茶挽きが珍らしくお座敷へ出たと思つたら、急に氣が大きくなつたみたいで、チャンチャラ可笑しいや。』

『可笑しいか可笑しくないか、來年のお正月をみて貰ひませう。』

『鬼が笑ふわよ。』

『冗談でせう。これでもちやんと早いとお約束が出來てるんですからね。』

『また今年の正月みたいに、三ケ日で歸されないやうに用心した方がいゝわ。』

『生アいふとノシちやふぞ。』

『面白いわね。結構！ ノサれるわよ。』

『皺くちやになつたつて、あたいの所爲ぢやないよ。』

『ねえ、留子さん——かういふ古い頭腦の衣裳とは、およそ交際にくいと思はない？』

『思ふわよ。——人絹の皺になるのが玉に疵だなんて、科學の發達を無視した認識不足で、イミないわねえ。』

『とか何とか仰しやいましたね。さア、來い！ 片ツ端から揉みくちやにしてベソをかゝせてやるから……』

『ほほほ、あんまり無理しない方がいゝわよ。もう、そろ／＼生地が弱つてピリついてるんぢやない？』

と冷笑されて、やゝヒスの症狀を呈したお披露目用藝妓衣裳が無念の形相物凄く、御婚禮用の

振袖姫へ武者振りつかうとしたので、總模様のミス半玉は色を変へて留袖にSOSを發した。
 『あんな——仲裁役でしよ。何とかして頂戴！』
 『あら、そんな手はないでせう。あたしも人絹聯盟の婚禮組合の會員なんですもの……』
 『困るわ、そんな薄情なこと言はないだつていゝぢやありませんか。』
 あはや、振袖と江戸褌に綻びが切れ、半玉の袖に禁物の涙の降らうとするトタンに、
 『うるさいわねえ。騒々しくつて眠られやしないぢやないの。』
 と棚の一隅から起き出した糸錦の丸帯の一聲には、双方共に濺々と手を引いたので、どうした風の吹き廻はしかと不審がれば、
 『昔からいふぢやありませんか。——長いものには捲かれるツてね。』

四

その翌朝のことでもあらうか、——鶴龜屋貸衣裳店にお職を張る白下着附の媒酌人用の江戸褌が、疲れた身丈を横たへて火熨斗にかゝつてゐると、一足遅れて目出度く入つて來たのは、總模様の振袖二枚襲に桶襦はじめ丸帯その他、花嫁御の附屬品一切であつた。
 『只今——』

『御苦労さま。』
 『小母さん——昨日はいろ／＼どうも……』
 『あゝ、矢張りお前さんだつたのかい。あたしはどこやらで見たことのある模様だとは思つたが、まさか自店のお嫁さんを仲人しようなんて、大神宮さまでも御存じあるまいねえ。』
 『ほほほ、あたし、角隠しして、恥じさうに俯いてましたけど、花婿さんの側に立つてらッしやる松竹梅の裾模様を見て、ははア小母さんだナと思ひましたわ。でも、神前結婚の神主さんを差置いて、お辭儀しちや可笑しいみたいでしょ。——御免なさい。』
 『いゝのよ、身内のものには……それよか、あんな——他店の振袖衆にはちやんと立派に扇を持つて、仁義を切らなきや駄目よ。』
 『あら、お次の間に控えて番を待つてた新婚さんは自前の仕立卸しぢやなかつたんですの？』
 『さうなの——あれで堅氣の素人ぢやないのよ。』
 『まア！ 衣裳は見かけによらないもんね。あたし、どこの百萬長者の御婚禮かと思ひましたわ。』
 『それが現代式なのさ。——二度と着るもんぢやなし、誰に見しよとて錢金かけよぞツてんで、なるべく現ナマを澤山握らせて嫁入りさせた方が、お母さんだつた悦んで可愛がつて呉れるでせ

う。

『さういへば、あたしの衣裳を着けたお嫁さんも、一萬圓の持参金付きでしたわ。』

『ほんとにさうかい。あたしは先方の仲人口をうつかり信用しないんだがね。』

『あら、いやな小母さんねえ。御自分で橋渡しなさつたお婢さんの身の上にも、いゝ加減な駄法螺を吹いてらっしゃるの？』

『いや、ナニ、それほどのことでもないが……實はこゝだけの話だけど、あの聲殿の月給は二十圓懸値がしてあるのさ。』

『あら、丁度百圓ぢやないの、おゝ、つまんない。』

『お前さんの方のも實は一桁違ひの千圓ぢやないのか。』

『御冗談でせう……立派な證書に金壹萬圓也と書いてありましたわ。』

『まア、素敵！ 銀行の定期預金ね。』

『いゝえ、生命保険のよ。』

『保険證書!』

『はア……實はこゝだけのお話ですけど、お嫁入りの衣裳をあたしので間に合はせたんで、三百圓ばかり儉約が出来たんですつて……』

『さうでせうね。』

『それだけのお金を最初に掛ければ、一萬圓の生命保険に入れるんでせう。』

『へえ、それで來年からの掛け金は？』

『そりやモチ、良人の責任よ。』

『あら、まア大變！ それぢや、まるで三百圓年賦の借金を背負ひ込んだやうなもんぢやないの。』

『そんな勘定になるかしら……』

『あゝ、いやだ、いやだ。これだから婚禮衣裳の渡り鳥が何枚あつても足りないんだよ。』

『つまり、景氣がよくなつたんでせう。』

『どういたしまして、そんなでもないから、損料屋が繁昌するのさ。』

『道理で禿ちやんがギツチョンくで、ホクくしてるのね。』

『だけど、元祖を自慢にして老舗ぶつてると、新店にお客を喰はれるよ。』

『さうでせうか。あたしなんか櫛笄からハコセコまでつけて、一日五十圓なら高くないと自惚れてますわ。』

『それがいけないのよ。お前さん——昨日、大神宮さままで出會つた花嫁衣裳を幾何だと思ふの？ あんたの前だけど、あの方が萬事上等のバリで、人絹なんか一本も混つてないのに、二割安の四

十圓とは如何？」

『あら、失禮しちやうわね。』

『おまけに、赤ちやんが生れた時の産衣までも、無料で奉仕する豫約付きなんだよ。』

『へえ、随分勉強するのね。どこの貸元？』

『あれが當時賣出しの萬引屋姐御の身内だとさ。』

『ほほほ、それちや仕入れが無償みたいなもんぢやありませんか。』

五

そこへモーニングが皺^{シワ}伸して貰ひに現はれたので、媒約衣裳が聲をかけた。

『お早よう——毛人さん。』

『いよオ、グツド・モーニング！』

『ほほほ、背負つてるよ、この人は——ズボンの膝頭が脹らんでるくせに……』

『それをいふな。わしや辛い。僕だつて、たまにはすつきりした足の青年紳士に借りられて、襦袢のお婚ちやんと並んで、一世一代の記念寫真でも撮りてえと思ふんだが、百姓や商人の臨時雇ぢや面白くねえや。——奴等は直ぐに胡座をかきやがるんで、まつたくシンが疲れるよ。』

『今日は、公休ぢやないの？』

『氣ラクなことをいつてらア……僕等は祝儀不祝儀兼帯の兩天秤だぜ。お前達みてえに黄道吉日ばかり選ばずに、三りん坊の佛滅だつて働かされてるんだ。』

『お氣の毒ね。これからお洒落して、どこへ御出張？』

『うん、今日はいつもの損料ぢやねえんだ。』

『あら、用事をつけてランデヴウ！ 生意氣だわねえ。』

『オイ、止せやい。そんなに邪慳にすると、ポタンがちぎれて辨償だぜ。』

『ほほほ、御免なさい。今月は婚禮つゞきで、見せつけられてばかりゐるんで、あたし、この頃ヘンなのよ。』

『仕様のねえ婆さんだナ。そんな粹な御用ぢやねえツてのに……實はね、今日は貸衣裳洋服組合の大会があるんで、この僕チンが當鶴龜屋を代表して出席するのさ。』

『あら、悲觀しちやうわね。——もう少し氣の利いた洋服、自店にゐないの？』

『チエツ！ あんまり思つた通りのことをいふなよ。——襦袢のお婚ちやんが笑つてるぢやないか。』

『失禮——他のお店にもモーニングばかり？』

『否、否！ 洋服専門のスタイル商會なら、エチオピアの大禮服だつて揃つてるよ。』

『それぢや、日本の華族さんのお召しになるのもあるんですね。』

『O・K！ 百萬圓の淨財を社會事業に寄附したんで、もう男爵にして貰へさうなもんだと、アテ事と何やらが二度も脱れた天下の富豪、大山千八郎翁の不用品が拂下げてある筈だ。』

『燕尾服やフロックもあんたと同値なの？』

『あゝ、大抵四五圓と思へば間違ひないよ、それからシルクハットが一圓かな。』

『女唐服もあるでせう。』

『あるとも……銀座の裏通りには、ほんの一二時間散歩のショートタイム専門の貸衣裳屋があるんで、銀ブラ便衣隊は大助かりださうだ。』

『へえ、そんなにまでして洋装したい女がゐますかね。』

『ゐるさ。近頃は男裝の麗人が評判になつたんで、セビロを着たがるお嬢さんもめツきりふえたらしい。』

『時勢ですわねえ。』

『但し、支那服だけは影をひそめたよ。』

『時節柄、無理もないと思ふわ。』

『ところが、早いとコレツテルを貼り替へて、滿洲服テナことにすると、俄然、借りたがる女共が多くなつたつてから、商賣、道によつて賢いぢやないか。』

『成程、流石だわね。』

『もつと感心したのは、ボロ／＼になつた一高の制服だよ。』

『あんな汚いものはルンペンだつて着ないでせう。』

『さにあらず。——こいつを熱海の海岸へ持つて行くと、松の木を背景の砂濱で、貫一氣取りの寫眞を撮らうテナ若いモボさんに引張り凧だつてから、衣裳に廢りはないよ。』

『それぢや、あたし達が裾の切れるまでも働かされて、さんさんにコキ使はれてからでも、失業するやうな心配はないと仰しやるんですね。』

『さうだよ。その點は僕が保證する。』

『毛人さんのゲンマンぢや心細いわ。昔から——お大名のおん襦袢は雜巾にもならないツていひますよ。』

『大丈夫——一體全體、われ／＼同志の貸衣裳には首なんてないぢやないか！』

舞臺の延長

一 新宿前奏曲

新宿の銀翼座を根城として、常にサラリーマン相手のレヴュー劇團「笑ひの涙」では、いかにも、その一黨の師走狂言らしい『ボーナス前奏曲』といふ喜劇をやつてゐた。

へ年末せまれば、悩みは涯なし、みだるゝ心に、うつるはボーナス

君こひし、口にはいはねど、サラリはあがらで、今年も暮れゆく……

舞臺はチャチな工業會社の重役室——窓の外から例の「君こひし」の替唄で、晝休みの若い社員が兩三名の合唱みたいなメロデーが流れ込むと、お約束の布袋腹で禿頭の社長が苦い顔をした。

『どうも、わるい唄が流行つてるやうだ。』

『イヤハヤ、まつたく聴くに忍びんです。——それに、私はあの催促唄といふ奴を見ると、ぞオ

つとしますよ。』

これは瘦せすぎな専務取締役——窓の硝子越しに指さして、何やら御覽に入れた。

『オニ、催促唄？』

『さうです。——あそこにゐるぢやありませんか。』

『うん、成程……女事務員達が食後の運動か。』

『もう、正月が半分来たやうな氣でゐるんですよ。』

さうだらう。——工場の空地では、彼女等がキャッ／＼と笑ひながら、ポーン／＼と羽根の音がしてゐる。

『あの高島田に結つとるのはタイピストぢやないか。……桃割れは電話の交換手か。ほほう、こりやまた新橋なぞとは別の趣きがあつて、何となく捨て難い風情ぢやナ。』

『社長——あんまり感心なすッちや困りますよ。』

『ははは……いや、さういふわけでもないがね。』

『あゝやつて、いつもは洋髪の女達が十二月の聲を聞くトタンに、われも／＼と日本髪に轉向するのは——出さうなもんだよっていふ一種のデモンなんです。』

『ははア、ボーナスの催促唄か。——こりや、どうも穩やかでないぞ。ふうむ、昔は早う嫁に行

きたいチウ謎にしか結はなんだもんぢやろ。』

『ところが、現代のお嬢さんは實にチャツカリしてますよ。尤も、無理はありませんね。——毎日、朝晩の新聞にはデパートの賣出し廣告がジャン／＼出るし、晝間は晝間で賑やかなチンドン屋が派手なスタイルで街を練り廻つてるんですから……』

『いや、そればかりぢやない。第一、雑誌が怪しからん。——まだ大晦日はおろか、十一月勘定の支拂も濟んどらんのに、新春特別號なぞといふ老大なものを發賣しちよる。』

『まつたく、あれはクサるですナ。』

『さうぢやろ。況んや、君——元祿時代がこんなだつたら、四十七士の中でも小野寺十内なんていふ讀書家は、新年號の雑誌にへパリついて、肝腎かなめの討入りに遅刻したかも知れんぞ。』

『オヤ、俺をモデルにした長篇小説が出とるんで、大石内藏之助が悠々と炬燵にあたつて、チビチビやりながら——こゝんところはどうかと思ふよ。俺はこんなにエラクなかつたなんて、訂正の朱筆を入れてたら、折角の忠臣蔵がワヤになつて終ひませう。』

『まさか、それほどでもあるまいがね。』

『いゝえ、社長——屹度、さうなりますよ。若し、そんなことにでもなつたら、マンジトモエと降る雪中を、本所は松坂町、吉良の屋敷の門前に待ち構へてる連中が可哀想ぢやありませんか。』

『ハハア、赤穂の浪士達がかい。』

『いゝえ、新聞社の特ダネ寫眞班がですよ。』

『君、君、君——氣は確かね？ この重大な會社の危機に、専務の精神に異狀でも呈したら、わしや辛う！』

『いや、大丈夫……それよりも、社長——もう年の市です。何とかして、この際、社長の靈腕をもつてボーナス資金を作つて頂かんことには、私も毎日、かうやつて工場へ來るのが辛いです。』

『うん、その邊は寢ても醒めても氣にならんでもないが、君——もう、借りるだけは借り盡したでナ。』

『うちの會社も早いとこ轉向して、非常時向きの製品を造るやうにすればよかつたんですなア……』

『後悔先きに立たず！ 古人はうまいことをいふちよる。なアに、君——會社の經營も七轉び八起き……そのうちには、えゝこともあるぢやろ。』

『ところが、社長——こゝ三四年といふものは、七轉び八轉びなんですから、まつたくシンが疲れるです。』

『まだ、君なんか、これからぢや。』

『それにしても、重役なんて稼業は他目で見るほどラクなもんぢやありませんね。』
 『うん、貰ふことばかり考へとる社員や職工の方が、結局はえゝ身分チウことになる。……ちよつと君——算盤を貸して呉れたまへ。』
 『はッ、えゝと……』

こゝで専務は現實の問題にぶつかつて、眼が醒めたみたいに卓上をかき廻したり、抽斗を開けてガタピシヤやるのだが、一向に見付からない。

『ははは……算盤を持たん重役などはどうかと思ふね。』

『いや、いつもは、こゝにちやんとあるんですが……』

『この頃は桁がはづれとるかナ。』

『は、いゝえ、只今、只今……給仕、給仕！ あゝモシ／＼、モシ／＼……小使、小使！ ころッ、誰もをらんのかッ……仕様のない奴等だ！』

頻りに焦れて、専務が呼鈴を押したり、卓上電話を鳴らしたり、重役室をうろ／＼して、更に荒々しく窓を開けて唖鳴つたりすると、それを社長がボカンと眺めて葉巻を落すところでカーテン——

二 神田明神の市

その社長の役をやつてる花輪隆——老役で近來メキ／＼と腕を上げた「笑ひの涙」の座長が、十二月も二十日の夜十一時過ぎ、銀翼座をハネてからの一杯を、新宿のどこやらで済ました酒機嫌もほがらかな歩調で、お供の弟子と二人、神田明神の境内へ足を踏み入れた。

『あゝ、年の市なんですね、先生——』

『なアんだ、今頃わかつたのか。——仕様のねえ田舎者だナ。』

『まア、さう、先生——箸の上げおろしに、いち／＼田舎者、田舎者ッていはなして下さス。』
 『だつて、お前は福岡縣人だろ？ 九州は田舎ぢやねえのか。』

『そりや、ま、さうですけど、若い妓に聽えるぢやありませんか。』

『ふん、よきがをるかナ。』

強度の近眼鏡をかけた花輪が、いつもの癖のネクタイをこき上げて、ひよいと焦點を合はせると、成程、そこには派手なキモノの雛妓姿が三人——羽子板屋の前に立つてゐるではないか。

『この邊にも花柳界があるですか。』

『馬鹿！ 大きな聲をするな。——今度はこつちの氣まりが恥しいや。』

といつて、若いながらも東京ツ子の座長は、この明神下に講武所といふ粹な巷のあることを、弟子の九州男子にいつてきかせてゐると、

『あら、先生——』

忽ち雛妓が取巻いて終つた。

『いよウ、これは……君達は僕を知つとるのかね。』

いさゝかテレ臭いのか——花輪隆は舞臺の口調と半々だ。

『あら、失禮しちゃうわ。——あたし達、トテモ銀翼のファンよ。ねえ？』

と一人が意味深長な眼をすると、あとの二人も黙つてはゐない。

『さうよ、先生——あの催促譬つての、トテモ面白いのね。』

『ほほう、君達は曾我廼家黨ぢやないのか。』

『あんなの——もう古いわよ。それから新派の花柳さんだつて、あたしなんか餘りピンと來ないわ。』

『あのね、先生——今やつてらッしやる社長さん、トテモうちの姐さんの旦那に似てるのよ。』

『先生——こりや隅に置けませんナ。』

『あら、こちら——あの時の給仕さんね。』

『いやア、あんまり、ほんとのことをいはんで下さる。』

『オイ、凸山——どこぞで、もう一杯やるか。なア、君達——よきに案内せえ。』

頗る悦に入つた座長——彼女等をも聘べる場所へ……といふのだが、もう遅いから、奥さんに叱られないやうに、眞ッ直ぐお歸んなさいなぞとマセたことをいつて、

『それよか。ねえ——』

『え、さうよ。』

『あら、どうかと思ふわ。』

と、雛妓三人は臺詞を半分吞込んだみたくにも、ちくちくしてゐる。

『ははア、支那蕎麥でも喰べたいのか。』

わしは察しのよい男ぢやるといはんばかりに、花輪隆がニヤ／＼すると、それまで師走の寒風に水ッ漉をすゝりながら、謹聽してゐた羽子板屋のオヤヂが、股火鉢のまゝで自分の出るキツカケを待つてゐたかく如く、こゝで初めて口を開いた。

『えへ、先生——御機嫌さまで……』

『オヤ、小父さんも僕を知つとるのかね。』

『冗、冗談でせう。——知らねえ奴はモグリでさ。』

『ははは……さうでもないだらうが、時に、景氣はどうぢやね。』
 『サッパリでさア……どうです、先生——一つ景氣をつけて、この雛妓さん達の御祝儀代りに……
 ……當節人氣の先生に買つて頂きア、こちらとも仲間で巾が利くといふもんで……いや、まつたく
 の話が……』

こゝまで持ち上げられては、今更ひッ込みもつかぬ騎虎の勢ひ……「笑ひの涙」の座長は先方の
 いひ値で、彼女等のために二尺の大羽子板を三枚も買はされたとか。

そして、彼が美しい一群と共に賑やかな退場をすると、仲間が羨ましがること……

『爺さん——いゝ商ひをしたな。』

『へ、へ、へ、たまにや、このぐれえのことがねえと助からねえや。』

『それも、お前が柄にもねえ新宿の隆ファンだつたお蔭だぜ。』

『ふん、ありや一體、何て役者だ？』

『あれ、お前——知らねえのか。』

『あはは……商賣、商賣！』

スポーツ漫談

相撲と野球

夏場所餘譚

そのむかし兩國の回向院時代には御免を蒙つて、晴天十日を標榜した本場所の相撲も、國技館
 の大鐵傘下で興行するやうになつてからは、半月がかりの十五日制にならうとも、初日が九日から
 と振れ太鼓がまはれば、その途中で雨が幾日降つたにしようかと、キチンと二十三日には千秋
 樂になるのに、近代のスポーツの花形たる野球は雨をおそれること甚しく、おまけにウキークデ
 ー御法度の學生野球は、土曜日曜とに限られたスケジュールを組み、たまさかの祭日を延期の穴
 にそなへてゐても、今年みたいなお天氣に祟られると、五月の二十五六日には曲りなりにも終了

すべき東京の六大學リーグ戦が、六月の梅雨期に入つても片付かないのである。それも東京附近だけが行樂の土日を雨で妨げられて、水源地の方はあまり降らないものだから、われら七百萬の市民はイミなく水道餓饉になやまされ、やれ一日も早く浄化装置にせんことには、世界三大都市の一として外人の手前も恥しいの、それ井戸なんぞといふ時代おくれの遺物は、不衛生きはまるから斷乎として埋めてしまへのと、指導よろしきを得たつもり文明の利器は頗る不自由なものと相成つた。

されば、相撲の夏場所が済んで一月もたつのに、まだ野球の方は春のリーグ戦でございといつても何の不思議もなさうな天候不順……紅葉のあるのに雪が降るなんて芝居のセリフも、その頃は天晴れな警句でもあつたらうが、今ぢや夏すぎて春去りやらすとも、一向に可笑しくないことになる。

さて、その相撲は夏場所の豫想として、双葉山が又しても八枚目の優勝額をあげることに、誰しも疑を挟まなかつたのに、あんな意外な結果となり、いろ／＼のデマは亂れ飛んだが、いやしくも天下の横綱たるものが、かう負けるやうでは榮譽に關するといふ彼の休場聲明が發表されて、およそベソの掻き切れなかつたのは例の男女ノ川だつたらう。
(そんなことをいつたら、俺なんかどうするんだい。)

この偉大なる未完成横綱は仁王さまのやうな口をいがめて、微苦笑禁じ得なかつたに相違ないのだが、彼は六尺三寸四十貫になん／＼とする巨軀にも拘らず、案外な手マメ足マメで、地方巡業の手すさびに小型のタイプライターを稽古してみたり、場所入りに自轉車に乗つたり、ダツトサンの免狀を取らうとして土俵の外で待つたを喰つたり、頗る愛嬌のあるユーモリストだから、いくら負けが込んで來ても、御見物衆が苦にするほど自分では氣にしないのではなからうか。

『もう二十萬も出來たつてぢやねえか。』

東京と申しましても廣い新市内の閑静な土地を買つて、立派な家も新築したさうだし、可愛い坊やの將來に何の心配もないのだから、せめて一場所に土俵の砂も三度ぐらゐの頃合ひ加減で、引退したらよさうなものだなんて、餘計なおせつかいを焼く人もあるが、御當人さまは案外な平チャラで、まだ東西制の確立せぬ去年の夏場所の八日目——珍らしや前日まで勝放しの彼が、出羽一門の飛將軍龍王山に寄倒され、われら東土俵の最前列で見ている鼻先へ、地響うつて落ちて來た時には、まつたく安き思ひもなかつたが、さしもの巨大漢も顔をしかめて起きあがれず、

『おゝ痛て……背中をぶつちやつた——背中をぶつちやつた!』

検査役の高島親方に澁面づくり、ちらと金齒を光らせたことであつたが、かくもほゝゑましき情景なぞは、いかにも彼の人間味がたゞよつてゐて、面白いと思つたのである。

この大器晩成型の豪放力士も既に三十八歳となれば、やがては途を後進にゆづる日も近くあるであらうが、その如何に拘らず、誰が次の横綱を張ることになるか。——不幸にも腸と右足に故障を生じて、今夏場所は途中で休んでしまった大關の羽黒山が、この最短距離にある實力者とは一般の定評であるが、彼の屬する立浪部屋では尋常兄弟子でありながら、いささか先を越されてクサリ氣味みたいな名寄岩とても、その發奮次第で見込みがないわけでもなく、來春から轡をならべて新大關となる安藝ノ海・五ツ島は果してそこまで昇れるか、どうであらう？

驕つて古參の前田山は？ といふと、彼が新入幕の十二年春からトン／＼拍子で躍進し、早くも翌年の夏には小結から大關に跳んだ元氣一杯の頃、その前途を力士くづれの某小料理屋のオヤチに訊くと、

『イヤ／＼、とても横綱になれる柄ぢやこわへん。』

洵にハッキリしたことをいつた、——而もその理由が妙である。

『もう三四貫も體重があつたらと、みなさんは仰しやるが、それよか野球をやめねえことには、あの關取も横綱の見込みはねえす。』

『ほほう、面白い説だね。——どうして前田山が野球と縁を切らんことには、横綱になれないんだ？』

『旦那の前ですが、麻雀の好きな野球の選手で、成功した奴がありますかね。』

力士くづれの小料理屋のオヤチの辯は、いよ／＼出でていよ／＼奇である。

『そりや、ま、さうだが……然し、野球選手の麻雀熱と、關取衆の野球好きとを一緒くたにしちや可哀想だらう。』

『だつて、先生——道樂に變りはねえですぞ。』

彼の舌鋒は鋭くなると同時に、旦那と敬つて呼んでゐたのが先生になつて來た。

『それから鯨關ですがね。——あれだけの器量と恰幅をもつてゐて、前田關と同じ場所に揃つて入幕したくせに、一方が大關になつてゐる現在やうやく前頭の三枚目……どつちかツてえと、この人の方が天分とやらにも恵まれてゐるんですがね。』

『有名な稽古ざらひださうぢやないか。』

『それもこれもアレのせみですよ。』

『色男は何かにつけて忙しいかな。』

『いいえ、野球に力癪を入れすぎるからでさア』

成程、鯨ノ里と前田山とは番附面でこそ東西に別れてゐるが、部屋ノ系統は同じなので仲もよろしく力士野球團を組織して主將前田山が捕手として一軍の采配を振れば、鯨は一壘手を承はつて副將格にをさまり、この春は某大學チームに勝つたことすらあるといふ。

然るに本職の方では、この御兩人ともあんまり出来がよくなくて、大關になつてからの前田山は小結時代の潑刺さを缺き、双葉・羽黒の兩強剛を相手として失つた今年の夏ですら、四つのタドンを頂いてゐるし、鯨ノ里にいたつては前に述べた三枚目が最高で、あとは十枚目あたりを出たり引込んだりの中軸の地位に甘んじ、折角五枚目までカムバックしたかと思へば、三勝十二敗といふ芳しからぬ戦績なんだから、來年のことをいつたところで鬼も笑はないであらう。

果して然らば力士に野球は禁物か。——どうも餘りドグマめいてゐて、小料理屋のオヤチの説には賛成しかねるが、若干の理はなきにしもあらで、相撲とは兄弟みたくに考へられる柔道の稽古でさへ、本格的の力士を心がけるものは自重すべきであるさうな。

況んや、他のスポーツにおいてをやといふことになるが、事實、この前田山チームの連中は自分たちの野球を娛しむのみならず、暇さへあれば六大學リーグ戦でも職業團の試合でもよく見に來てゐる。

この職業野球といへば、春夏秋の三季制があるとは名ばかりで、春の覇權を巨人軍が獲得して

十日と休息は與へられず、今や夏のスケジュールに入つてゐて、だん／＼とその面白味の増加しつつあることは、いはゆるゼニを拂つて見る觀衆の次第に多くなつて來てゐるのでもわかるであらう。——ところが職業野球として一番大切な時であるのに、かれら九つのチームでは最高幹部がコチ／＼で、いたづらに内輪採めにはかり没頭してゐるかの如く思はれる點があつて、甚だ遺憾千萬である。

それかあらぬか、かくてはあらじと氣のついたおエラ方諸公は、お互ひに心を入れかへて、商賣の道にいそしむるではないかと、最近に申合せをやつたやうだが、さうした機構の改革に遠慮のないメスを揮へば、充分に算盤に合ふ筈であるのに、かれら二一夭作の五ばかり先にやりたがるので困る。

これはイヤハヤどうも……思ひがけない横丁へ脱線してしまつたが、その春の職業野球の見物に、かれら力士連が初日を出したのはイーグルス對金鯨、名古屋對セネタースの取組んだ時でもあつたらうか。——番附發表の直後で、前田山が大關は大關らしく羽織袴で威儀を正して現はれると、一足ちがひに薄い角袖を引つかけた鹿島洋が左の足首に縋帶の草履ばきで登場——更に半時間も遅れて紺立縞の瀟洒たる洋服姿の鯨ノ里と顔がそろつて、いづれもネット裏に陣取ると、少し離れた別席に取的諸君が控へてゐた。

試合は二つとも延長戦に入り、イ軍對金鯱は十回に及んで五・三でイーグルスが勝ち、名古屋對セ軍は聯盟規約の十一回になつても、いづれも得点なきままに引分となつたが、この日セネタースの投手野口の出来は秀逸で、三振十有五を奪つて而も四球は僅かに二つ……これに堪能した三人の關取は、
 (おいらも夏場所ちや三振を十五も取らうぜ)
 暗黙のうちに申合せたことであつたらうに、二日目の双葉に電撃戦を試みて成功した鹿島洋ですら、あとは場所運つたなく七勝八敗は、大半が勝越してゐる西方としては成績不良の組に屬し、野球ファンと土俵生活とは、あるひは兩立しないのかなと、つまらぬ縁起を擔いだものもあつたといふ。

ラグビー・カクテール

第一景 オフサイド

『でも、あたし、わかんないんですもの……』

『あんな顔してるけど、ほんとにわかつてる人、いくらもゐないんだよ。』

『あら、みなさん——インチキ?』

『いや、そんなんぢやないけど、たゞ、もう、向ふのゴール目がけて突進して、あの楕圓形の球を敵の陣地へタツチすれば、即ちトライと稱して三點——』

『そのぐらゐは知つてますわ。——それから、中央に立つてポストの間へうまく蹴上げれば、二二點を加へて合計五點のゴールでせう。』

『それだけ知つてりや結構ぢやないか。あとはレフェリーの笛に任せてればいゝんだ。』

『簡単みたいね。』

『さうさ。大體がラグビーの起原たるや、一切手出し御法度のサッカーの試合最中、珍らしく球にありついた茶目小僧が、嬉し紛れに、他へはやらじと、抱へて逃げ出したことから始まつたんだとかいふよ。』

『およそナンセンスね。』

『うん、それだから、敵味方入り亂れて夢中でやつてるけど、誰が何で反則を喰つたんだか、御當人達にはわからないらしい。』

『いゝわね。——それがほんとのスポーツマンよ。』

『さうかも知れない。アメリカ渡來の野球なんかと違つて、イギリス傳來の紳士の競技は、すべてが絶対神聖だからね。』

『審判官が選手や應援團にコヅかれることない？』

『あるもんか。拍手以外の聲援嚴禁で、入場料を取るのもどうかと思つてくらゐ良心的のオンパレだ。』

『それこそ、ウインター・スポーツの華でせう。』

『何とかいつてるぜ。それだけ心得てりやソウトウなもんぢや。さア、行かう。——あとは實地について詳しく御説明申上げてやるよ。』

見ることは好きだけど、よく規則が呑み込めないで、兎角引込み思案の彼女を連れ出して、競技場のスタンドにアベックで納まつた彼氏——得意の半可通を振り廻して、四邊の淑女並に紳士諸君へ聞えよがしのお徳舌いとも姦しい。

『よく見て、御覽——すべてラグビーでは球を自分の身體より前へ投げるどころか、受け損なつてポロリと一インチ轉げ出してもいけないし、球より前へ出て、も反則なんだ。あッ、今のなごはひどく出過ぎてたね。オフサイド、オフサイド！ レフェリーの奴、どこを見てやがるんだ。あんなのありか。……あッ、ピックアップ、ピックアップ！ 彼奴、伊達に笛を持つてるみたい

ぢやないか。……』

イギリス流のスポーツ禮讀者にしては口のうるさい男だ。——レフェリーだつて神様ぢやなし双方三十名の猛者が高速度に展開する瞬間的プレーを善意に判断して、三分の一の反則を見逃さなければ上乘の出來としてあるのに、遠く岡目八目の素人くさいスタンドプレーと、近く監視を怠らない女人の見方では、若干の相違もあらう。

そこで、我慢の出來かねた有志が彼氏をたしなめた語に曰く——

『黙れ！ 貴様こそ出過ぎてるぞ。——オフサイド、オフサイド！』

第二景 タツクル

昨今のラグビー試合では、地味な前衛諸勇士が集團的健闘によつて勝敗の左右されること多く、輕快なスリクオーターの活躍も潰されがちなので、派手な選手の名をワンスと叫ぶ聲も、スタンドに聞かれなくなつたが、華やかな慶應全盛時代の名ハーフ萩原などは、随分、大向ふの觀衆を唸らせたものだ。尤も、これはスポーツ・ジャーナリストのフリー・ランサーが、あちこちの雑誌で女學生に大モテだなんて與太を飛ばした爲、卒業後の就職に際して、苦勞性の某會社の重役に氣をもませて、

『そんなに若い身空で女の子に騒がれるやうでは……』
 と二の足を踏んだとか、笑へぬナンセンスもあつたが、次のトライ・ゲッター藤井もアキレス
 腿を切つて、お醫者さまから爾今運動断念を申渡されるや、
 『ラグビーが出来ないやうぢや、大學もイミないよ。』
 とばかり、蒲田の映畫俳優に轉向したゞけあつて、スリークオーターとして評判されたこと相
 當以上、

『あら、藤井、藤井！ スゴいのねえ。』

と戦友の奮闘までも、彼の手柄みたいに稱讃を博したさうな。

その後のラグーマン中での人氣者は誰かとなると、各人各説はあらうが、同じく映畫界に入つ
 たゞけのことはあつて、何といつても明大のフルバック時代の笠原に止めを刺すのではあるまい
 か。——あのきや、やな坊ちやん／＼した姿に闘志満々、ゴールラインへ全速力を以て突貫して
 來る敵の猛者にタツクルしたり、左右自在のキツクに鮮やかなところを見せるものだから、小走
 りに走る度毎、ふさ／＼と頭髮が額に被さつて波うつのを見て、

『あれが何ともいへないね。』

と男の子にさへ風情ありけなのだから、或は女學生間には大變なのかも知れない。——ノーサ

イドの審笛が鳴つて、選手控室へ引上げようとする途に、スクラムを組んだ制服の處女達が、ま
 だ泥だらけの彼に萬年筆をつきつけて、サインを強要すること稀でなかつたとか、いつの世にも
 人氣スターは、無形の税金を背負はされねばならぬものであるらしい。

果して然らば、戀のタツクルに成功した例はないであらうかと、元京大のフォアワードで鳴ら
 した先輩に訊ねたら、戦場に臨んでは勇敢な彼等も、この道にかけては案外意氣地がないやうだ。

『そんな柄の悪いことようせんわ。』

『どうして？ 戀愛もまた神聖ぢやないか。』

『そやかて、他人のリーベを横取りするチウのも忍びんことや。』

『ははア、そんな善人揃ひぢや失戀大菩薩が多いだらう。』

『そら、仰山あるで……折角、楽しい戀愛行進曲で夢中になつとる時でもナ、横合ひから出て來
 よつた戀敵にタツクルされたら、假令掌中の球と雖も、トタンにダウンせんならんのがラグビー
 の鐵則や。』

『そ、そ、そんな馬鹿な……』

『そこがわれ／＼の辛いとこや。』

『は／＼、そんな阿呆らしいことありか。』

『あんたはイギリスの實話美談を知らんで、そないにいひなはるんやろが、あッちやの人は流石に本場や。』

『三角關係なんかなくてもいふのかい。』

『いゝや、わがイギリスでラグビーを心得とる泥棒は、どない苦心してモノ取りに忍び込んでも、そこの家の人に——こらチウてタツクルされたら、なんぼ欲しい思うて盗んだ品物でも、ボロリ落して逃げよるさうな。』

『そのまゝ抱へて駆け出した方がトクだらうに……。』

『そこが萬事スポーツマンシンプのフェア・プレーや。』

第三景 ト ラ イ

銀座裏の小さな酒場ラインアウトの主人は自分でシェーカーを振つて、いろ／＼の需めに應ずる勉強を得意の賣りものに、常連を悦しがらせてゐるが、その中でも獨特の調合を自慢なのはラグビー・カクテルである。

そも／＼……と開き直つて説くまでもなく、何々カクテルと名づくるものゝ、調味加減に混合するもろ／＼の酒の分量は、大體において定まつてはゐるが、各自ビアテンの好みによつて、

デリケートな千差萬別を現はすものであるとか。——これも、その道の半可通から聞かされたところだから、ほんとにさうか否かわからぬが、それにしても、ラインアウト主人の薦むるラグビー・カクテルぐらゐ、その日、その客によつて出鱈目な味加減はないであらう。

例へば、今年の正月元日、一年おきに吉例の慶京戦が神宮外苑の競技場で行はれた夜の酒場の光景である。

『大將——今日のは馬鹿に辛口だね。』

『へえ、五十三對六のベラ勝ち——その六點もノー・トライの二ペナルティぢやありませんか。』

『成程、こりやウキスキー臺だね。』

『さうです。慶應のユニフォームを利かせました。』

『ははア、それで黄色が勝つてゐるわけか。然し、君——あれは横に黒のんだら、縞があるぜ。』

『ですから、同じ黄色のウキスキーでも吟味しまして、ブラック・アンド・ホワイトを用ひました。』

『あ、さうか、それぢや、もう一杯——』

と御機嫌の客があるかと思へば、他には浮かぬ顔の紳士がゐた。

『主人——僕のはひどく甘口だが、同じ日のラグビー・カクテルのくせに、どうして、こんな

に違ふんだい。』

『へえ、こちらは三田の御最辰ですし、あなたさまは京大の御出身とお見かけ申上げまして加減しました。』

『ふうむ、敗軍の將は文句をいふべからずかナ。』

『お氣の毒さま……ハイ、慶應の先輩——お代りが出来ました。』

『ヤア……オヤ、僕のも前のと味が違つてるぜ。こいつは先刻のより筥棒に辛いや。』

『へえ、後半はどうしてもトライが多うございます。』

そこで、京大方がやうやく合點合點した。

『ははア、一トライ、二トライ……と敵陣深く喰ひ込んだ數だけドライ・ジンを入れるのか。——わしや負けた!』

『その代り、こちらさまから罰杯を二杯貰つて差上げます。』

ほんこの老婆心

私は地方官吏の俸に生れたお蔭で、おやぢ轉任のまに、小學校を六つも移り歩いた。それも、今みたいに國定教科書がつくられる前の時代だから、その度毎に何もかもチグハグだらけで、おまけに言葉が變つて來るとあつては、人一倍ハニカミヤの身には、實に、やるせない思ひだつた。それで、中學へ入るまでの二年間を、郷里の小學校でやることになつたのだが、因州因幡の鳥取から茨城縣は利根川ベリの城下町への長旅——而も、東京へ講習に出て來た人に托されて、新橋ステーションで叔父にリレーよろしく、まるで荷物みたいに渡されたんだから、相當にウンザリしたが、それでも、もう轉校しないでもいと思へばこそ、我慢する氣になつたのだらう。

ところで、わが郷里の家といふのが、質物渡世をいとなむ天保生れの七十近い祖母と、帳面づけで番頭格の從姉に、あとは女中ばかりで、猫も牝しか飼つてゐないのだから、僅か十二歳の子供ながらも、男は小生唯一人……何しろ、三十幾つから後家を通して、殆んど獨力で質屋を開業したほどの婆さんとあれば、居直り強盜が入つて來ても、

『みんな他人さまの預りもんだから、めつたに手をつけてお呉れでないよ。』

戸外で見張りの棒組と二人へ、五圓札と毛布を一枚づゝやつて、

『えらさうに、疊へ刀なんか突刺してたけど、彼奴の足はブル／＼だつたよ。』
 まるでアベコベみたいな逸話(?)のある女丈夫ではあるが、矢張り孫は可愛いらしく、おまけに遠方から来た大切な預りものだから、萬一のことがあつてはと、そんな責任観念も若干は加味されてゐたのであらう。

『河童に足を引張られると大變だから、深いところへ行くんぢやないよ。』

夏の泳ぎは男の子として、絶対に止めもしなかつたが、胸のあたりを限界線に戒しめられて、それより先へは進むなかれと、堅く禁じられてゐた。

それかあらぬか、私の泳ぎは一向に上達せず、その當時としては頗る川幅が廣いやうにみえても、成人してから眺めると、いはゆる深いところは十間となささうであるのに、どうしても向ふ河岸へ越せなかつたのである。

『辰ちゃん——何でもねえぞ。俺たちが附いてるから、一遍目をつぶつて泳いでみなよ。』

さうも友達に云はれて、勇氣づけられたのであるが、お祖母さん孝行の私はたゞニヤ／＼してゐるばかりであつた。

二

次は私の子供のことである。——二歳にして母親と死別した彼女は、それから女學校を卒業するまでの十有八年を、亡妻の阿母おやうのところおやうで養はれたのだから、これはオヤチたる小生以上に祖母さん育ちである。

當時、祖母は四十四歳だつたさうだが、その孫娘が二十三と長ずる今日と、大して變りがないくらゐの老人おやうにみえた。いや、それほどに私が、まだ若かつたともいへるであらう。——閑話休題!

その義母は格別に高い教育を受けたこともない明治八年生れだが、私が信じて呉れといつた唯一言に、何の不平もいはず、兎に角、女學校を卒おやうはるまで、子供を仕込んで呉れた體育方針に面白い見識をそなへてゐた。それは既に小學校からの一言言であつたらしく、いはゆる運動會などの競走に出場する時でも、

『一等をとると承知しないよ。』

かういつて、まづ子供を戒しめたさうな。——どうしたわけか、わが娘は割に足が速くて、黙つてゐれば一着になつたといふ。私なんかは寧ろ、一等賞を買つて來る方が、何となく鼻が高くなつて、それにかこつけて祝盃をあげかねまじき親馬鹿組だが、うちのお祖母ちゃんは却つてそれを忌避し、二等以下なら入賞よろしいといふのであつた。

舊友新體制

ところが、まゝにならぬは世の中で、彼女の孫娘はベソを掻きながら、一等の賞品として美しい本などを頂いて歸らなければならなかつたのである。

『みんなが遅いもん……』

『さうか、さうか。そんなら仕方がないわ。——その代りこの次、一等になると承知しないよ。』

世界的に名聲を謳はれた人見絹枝嬢の短命に終つたスポーツ生活をみるにつけても、うちの預り娘は伸びゆくまゝに、いゝ氣になつて選手にはさせられぬといふのが、蓋しほんとの老婆心であつたのではなからうか。

私は相當にスポーツファンではあるが、この方針に異議を申立てることが出来なかつた點に、いさゝか考へさせられるものがあるやうな氣がするのである。

光輝ある紀元二千六百年奉祝の朝、神戸の高林ですがといつて電話がかゝつて來た。——絶えて久しき警咳に接するのは、正に二十六年振りだから、

『いよう、これはく……』

とばかりである。

年に四五回は尠くとも出て來てゐるのだが、どうも忙しくてお目にかゝる暇がなかつたといひ、幸ひ今日は夕方まで空いてるから、お宅へお邪魔して久瀾を叙したい、それともどこかで……との申入れだ。

『實はお晝までに行かなけりやならないところがあるのだが、夜はどうなんだい。』

と反問すると、

『夜は僕の方で困るんですよ。——實は五時二十分着のカモメで來るやうに、女房が呼んでありますね。』

この野郎！と思つたが、仕方がない。

『それちや明日も駄目だらうナ。』

『えゝ、昨日と今日だけが休みで、また明日からは商賣がありますからね。』

『そいつは困つたナ。——俺はどうしても今日の日本野球を見ないことには、義理のわるいことになつてるんだよ。』

『なアんだ、そんな用ですか。——それちや一緒に見ながら、積る話をしませう。』

『ほほう、話せるね。——君はファンか。』

『これでも西ノ宮にやチヨイ／＼出かけてますよ。』
 『奥さん御同伴でか。』
 『いえ、子供を伴れてゝさア。』
 そんな電話の受渡しがあつて、双方ジャスト十二時に水道橋の上で會合したのだが、お互ひに學生時代の一別以來でも、どこか若い頃の名残があるらしく、胸に紅いバラの花を挿さないでも、白いハンケチを左の手に持つてゐないでも、直ぐに相手がソレとわかつた。
 かくて後樂園のスタンドに客となつたのだが、何しろ二十六年目といへば、悠久二千六百年の百分の一にしか當らない歲月ではあるが、人生五十年の半分だから馬鹿にならない。——お古いことで恐縮だが、われらは明治の末葉に一級違ひの中學生生活を試み、その野球部のマネージャーとなつて、スポーツの何たるかを理解しない當時の校長に睨まれつゝ、僅かな費用で苦勞したのである。

それが大正の御代となると、舞臺は一轉して、われは本郷の下宿屋に陣取つて法學にいそしみ、彼は越中島の高等商船に入つて未來のキャプテンを夢みてゐたのだが、その時分の商船學校には青山學院だつたかを出た名投手がゐたので、まだ／＼腐つても鯛の一高に、一泡ふかせてやらうと挑戦したところ、練習試合なら應じてもよいと、ひどく格式を重んじるみたいな受け方に憤慨

して、その交渉の歸りに寄つて呉れたのが大正四年のことでもあつたらうか。

爾來、彼は海の男となつて世の荒波と戦ひ、今や船舶業者として寧日なく、われは陸に平凡なるサラリーマンとなり、更に文筆稼業に轉じて相會せざること二十六星霜——近年は正月の賀状も遠慮がちになつてゐたのだ。

『かういふ目出度い日に、あんたと野球を見ようとは思ひませんでしたね。』

『俺は、かういふものを見るのを、半分は商賣みたいにしてるんだが、まさか君が西ノ宮の常連とは考へも及ばなかつたよ。』

『見つけると、矢張り面白いですね。』

『永いこと大連にゐた倉田が、十年振り東京支店詰になつて歸つて來ると、トタンに後樂園のフアンに轉向してしまつて、テンポの鈍い六大學の野球なんか、もう見る氣になれませんかといつてたが、そんなもんだらうか。』

『僕も最初は倉田に勧められて行つたんですよ。』

『あゝ、ありや君ンとこと同じ町の出身だつたね。』

『そればかりぢやないんです。——あれの妹ツてのが僕の女房なんですよ。』
 『なアんだ、さうか。』

といった調子で、あれやこれやの今昔の感だつたから、さぞかし御近所は迷惑でもあつたらうが、いかに口はおしやべり姦しくしてゐても、われらの眼は常に球を追つてゐた。

『兎に角、去年見た時には、フライの満足に掴めないライトなんかゐて、何となくお粗末なチームもあつたが、一年たつと天晴れなものになつてる。——外野にヒットが飛んでも、そのあとの球の処理は、流星にうまいこなし方だと思ふね。』

『それに、セカンドが外野から来る球を、上手に捌くのも眼につきますよ。』

『一壘にも名手がゐるだらう。——黒鷲の中河なんてサトウハチローも好きだつていつてたが、いかにも職業選手らしいぢやないか。』

『これで巨人軍の澤村が復活して、須田と二人がマウンドに立つとなると、ほかのチームは齒が立たなくなるんぢやありませんか。』

『いや、その點は翼の野口の好調の時にも同じことがいへるが、みんなバッテイグも利いて來たから、さう簡單には片付かないよ。』

『すると、來年の春は益々面白くなりますかね。——あつちへおいでの節は西ノ宮へ御案内しませう。』

『いゝねえ。——これが世の常の友人同志だと、まづ一杯といふ段取りで、夜ふかしを男の友情

みたいにするんだが、われ／＼は二十六年振りに會つても、野球見物でコト足りるんだからね。』

『これがほんとの新體制ですよ。』

『あゝ、奥さんによろしくいつて呉れ。』

『いや、まだ時間は大丈夫ですから、もう一試合見ませう。』

六双中道物名

印 檢

出文協承認 7220290 號

昭和十七年十月五月初版印刷
 昭和十七年十月十月初版發行
 (五〇〇〇冊)

定價一圓八十錢

著 者 辰野 九郎
東京市芝區芝公園七號地十番

發行者 丸山 誠
東京市芝區芝浦二丁目三

印刷者 長尾 文雄
東京市神田區淡路町二丁目九

配給元 日本出版配給株式會社
東京市芝區芝公園七號地一〇番

發行所 紫 文 閣
櫻井東京三四二六七
 電話 芝三九四四
 會員 一一二〇四五號

長谷川 伸海の豪族

濱田彌兵衛商船隊の意氣と力を描く長編戯曲を始め、傳統の日本氣貫を昂揚する巨匠の健筆愈々冴ゆ。

¥ 1.80

額田 六福 文三捕物帖

大江戸の面影も濃いお役者文三の捕物帖。色とりどりの謎の事件が醸し出す興味津々の物語九篇を収む。

¥ 1.50

甲賀 三郎 音と幻想

探偵、推理、ユーモア、外地、海洋小説と、著者の至らざるなき才筆を示す會心の好短篇十三話。

¥ 1.60

大下 宇陀兒 市太郎とたん瘤

獨特の探偵小説、スパイ小説十三篇、賑々たる人間味を描いて興趣満點。

¥ 1.60

濱本 浩海 峽

練達の現代小説七篇を収む。眞心と愛情に満ちた、新時代の讀物。人生の斷面を描破する。

¥ 1.60

額田 六福 武道諸國物語

諸國に咲いた日本武道經十二篇。傳統の精神、武道の義理と人情とは所をかへ形をかへて全巻に輝く。

¥ 1.50

直木 三十五 日本仇討物語

日本独自の仇討を實説によつて眞面目を示す物語集。その意氣と筆の勢、直木文學の獨壇場。上下二卷。

各 ¥ 1.80

紫閣版大衆讀物選 各一 送料

425
600



榮文園

（田中）

一〇

神

神樂

舞

終

